



# インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

真下, 裕之

---

**(Citation)**

神戸大学文学部紀要, 38:51-107

**(Issue Date)**

2011-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCDOI)**

<https://doi.org/10.24546/81002753>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002753>



# インド・イスラーム社会の歴史書に おける「インド史」について

真 下 裕 之

## はじめに

13世紀初頭、デリー・スルターン朝が成立したことをきっかけにして、インドではイスラーム社会が本格的に展開しはじめた。本論の問いは、それ以前のインドの歴史をこの社会の歴史書がどのように叙述したのか、という点にある。

インド・イスラーム社会で著された歴史書にはある時期以降、ムスリム到来以前のインドの歴史に関する叙述を備えるものが見られるようになる。それらの叙述は内容、分量、形式の点で様々であったが、これを総称して、本論では「インド・イスラーム前史」と呼ぼう。このようなインド・イスラーム前史が歴史書の中に備わったことには、2つの意味を見いだせるはずである。第一は、そのような叙述を持ち込むことによって、その歴史書の叙述対象がムスリム王朝という政治的単位やムスリム集団という社会的単位ではなく、インドという一定の地理的空間に設定されることである。第二は、イスラーム社会の登場に先立つ前史が加わることにより、それ以降の歴史と併せて、インドの通史的叙述が導かれ得ることである。本論では、インドという一定の空間を叙述の対象とした通史的な歴史叙述を「インド史」と呼ぶことにするが、このようなインド史の成り立ちを考察する上でインド・イスラーム前史は重要な手がかりを提供してくれるはずである。

インド・イスラーム社会における歴史叙述の歴史に関する研究は数多い<sup>1</sup>。ペルシア語文化の所産の一端として、各々の歴史書、歴史家が帯びていた文化史的意義を問う事例研究も積み上げられてきている<sup>2</sup>。しかしインド・イスラーム前史については、もちろん研究者の認知するところではあるものの、これを総合的に検討した研究はない。このことは、当該時代のインド・イスラーム社会における歴史認識の特性や展開について、そして19世紀以降に登場する近代インド諸語や英語によるインド史叙述の前段階について、我々の知見に重大な欠落があることを意味する。一方イスラーム世界の他地域に関しては、各々の社会の当事者たちによる歴史叙述について、日本の研究者による有益な成果が現れている（[宇野2002]，[大塚2007]，[小笠原2008]，[小笠原2009]，[守川2007]，[守川2010]）。これらの成果に対して、インドの事例に関わる新たな知見を付け加えることも必要とされている状況にある。

一方、インドの過去に対するインド・イスラーム社会の態度は、インド在来の文化的所産に対する当事者たちの対応という、より大きな文化史上のテーマに関わる問題でもある。本論はこの問題に関して、インド古典籍の継承という側面から一つの知見を提供することにもなるだろう<sup>4</sup>。この問題については[Ernst 2003]という刺激的な論考が出ているが、インド・イスラーム前史の各論に関しては、後述するとおり修正すべき点为数多くある。

---

1 歴史書、歴史家に関する基礎的な叙述としては、書誌的概説を別とすると、[Mukhia 1976]，[Sarkar 1977]，[Mohibbul Hasan 1983]，[Nizami 1983] があり、デリー・スルターン朝時代の歴史書についての各論として [Hardy 1960]，[Digby 2001]，[Siddiqui 2010] などがある。ムガル帝国時代の歴史書については、網羅的な分類・記述を試みた [Conermann 2002] という労作がある。

2 例えば [Qasemi 2000]，[Mashita 2001]，[Waseem (ed.) 2003]，[Hayoz 2005]。歴史書の情報源について考察した [Athar Ali 1995] もあるが、探求の余地はなお残る。17世紀末以降の歴史書、歴史家の特徴については [Malik 2004]，[Alam & Subrahmanyam 2010]。

3 最近ではペルシア語による歴史叙述とベンガル在来の歴史叙述との関係を扱う意欲的な研究も出た [K. Chatterjee 2009]。

4 建築をはじめとする様々なモニュメントにおけるインド的な伝統の継承という問題については [Flood 2009]。この文献は稲葉穰氏の教示によって知った。

以上の問題意識に鑑み本論は、インド・イスラーム前史の分析を通じて、インド史のひとつのかたちを探求することを目的とする。考察は次の手順による。まず13世紀から18世紀末までのインド・イスラーム社会で著された歴史書の類型を一覧し、インド・イスラーム前史を含む類型を特定する。そのうえで調査すべき歴史書を網羅する（第1章）。調査対象の歴史書から、インド・イスラーム前史を構成する諸要素を抽出し、整理する（第2章）。そして各々の歴史書における、インド・イスラーム前史の要素の分布を時系列順に配列する。これによって多くの歴史書に継承された、主要な要素を特定する。さらにその要素が出現した時期とその後の展開を記述し、その意味を検討する（第3章）。調査対象とする時期の下限を18世紀末とするのは、それ以降、インド・イスラーム社会の歴史叙述をとりまく状況が大きく変化したためである。

なおインド・イスラーム社会といっても、その実態がかなり複雑であったことは言うまでもない。ムスリム政権がインド各地に分立していた期間は長かったし、宗派の側面においても、アワド・ナワーブ政権のようにシーア派が卓越する状況も生じたことがある。またムスリム諸政権の覇権にもかかわらず、人口比で見るとほとんどの地域でムスリムは少数派であり続けた。ムスリム政権に奉職する非ムスリムの貴族、軍人、文人の活動は、インド・イスラーム社会にきわめて多様な担い手がいたことの証である。歴史書をはじめとする著述活動も例外ではない。本論が取り扱うペルシア語の歴史書のうち相当数が非ムスリムによって執筆された。しかし少なくともインド・イスラーム前史の諸要素に関する限り、このような著作の環境や担い手の差異がその内容をさほど左右しなかったことは、本論の分析が確認するとおりである。

## 1. インド・イスラーム社会における歴史書の類型

### (A) 類型の網羅

本節ではインド・イスラーム社会における歴史書の類型を網羅することによつ

て、インド・イスラーム前史を含む類型を特定する。ただし、以下の分類は歴史叙述の当事者たちが行ったものではないし、各々の名称に対応するペルシア語・アラビア語の用語があるわけでもない。それでも数々の歴史書を総覧すると、叙述の対象や形式に即して、本論の方法上必要な類別を見いだすことは可能である。そして本論の操作によって浮かび上がるこれらの類型に、例えば後述する「インド総合史」のごとく、当事者たちの歴史認識が反映されているものがあることには注意すべきである。

### (1) 王朝史

単一の王朝を叙述の対象とする歴史書の類型をここでは王朝史と呼ぶ。1467/8年に執筆されたマールワ地方ハラジー朝の王朝史 *Ma'ātir-i Maḥmūd Šāhī* を初めとして、当該の時代にはインドの各地方でこの類型に属する歴史書が著された。<sup>5</sup>ある地域に存続した一つの王朝に焦点を当てる点で、この類型には後述するインド地方史の類型と重なり合う部分がある。しかし次の2点において、王朝史はインド地方史と区別すべきである。第一に、AN（以下の議論で引証する一次文献は参考文献に挙げた略号によって示す。以下同じ）をはじめとするティムール朝・ムガル王朝史は、ティムール朝の系譜から叙述を書き起こすのが通例である。歴史叙述の舞台が中央アジアから北インドへと移動するため、その叙述は地理的な制約を越えて展開する。この点において、王朝史は一定の地域を対象とする他の類型から区別されるべきである。第二に、デカン地方アー

<sup>5</sup> 他の例としては以下の文献を挙げうる：*Tārīh-i Maḥmūd Šāhī* (1484/5-1489/90年に成立；アフマド・シャーヒー朝を扱う。以下略して記す)、AN (1602年；ティムール朝・ムガル帝国)、*Mirāt-i Sikandari* (1611年あるいは1613年；アフマド・シャーヒー朝)、*Tārīh-i Quṭb Šāhī* (1617年；クトゥブ・シャーヒー朝)、*Iqbāl Nāmah-yi Ġahāngīrī* (1627年以降；ティムール朝・ムガル帝国)、*Futūḥāt-i 'Ādil Šāhī* (1644/5年；アーデル・シャーヒー朝)、*Badšāh Nāmah* (1666年；ティムール朝・ムガル帝国)、*Tadkirah-yi Salāgin-i Ġagatā* (1724年以降；ティムール朝・ムガル帝国)、*Tārīh-i Fayḍ-Baḥš* (1776年；ローヒッラ・アフガーン)、*Tuzuk-i Wālā-Ġāhī* (1786年ごろ；アルコート・ナワーブ政権)、*'Imād al-Sa'adat* (1808年；アフド・ナワーブ政権)。

デイルシャーヒー朝の王朝史 *Futūḥāt-i ‘Ādil Šāhī* のように、当該地域に先行するムスリム王朝がある場合でも、王朝史はこれらを叙述に含めない。この場合においても、一つの王朝を対象とすることによって、地理的空間とは異なる歴史叙述の基準が働いていると見るべきであろう。

## (2) 一代史

一代史は一人の君主を叙述の対象とする類型である。トゥグルク朝君主フィールーズ・シャーを扱う *Tārīḥ-i Fīrūz Šāhī* (1398年以降成立) を初めとして、この類型にも数多くの例がある<sup>6</sup>。ただし当該君主の誕生からその人生を叙述するものがある一方 (例えばシャー・ジャハーンを扱う *‘Āmal-i Šāliḥ*)、即位以降の事績に叙述を限定するもの (例えばアウラングゼーブを扱う *‘Ālamgīr Nāmah*) もある。両者はそれぞれ、個人史の延長ないし王朝史の縮小版と見なせる可能性もあるが、その詳細な検討にはここでは立ち入らない。また君主自身が執筆した回想録もこの類型に含めることができる。例えばジャハーンギールの時代、その回想録 *Ġahāngīr Nāmah* に比肩しうる同時代史料がついに現れなかった事実からは、君主個人の過去が即国家の過去たり得た歴史学の状況を容易に想像できよう。

## (3) インド地方史

インド地方史の類型は、前述のとおり王朝史とも重なり合う部分があるが、インドの特定の地方に叙述を限定し、その地方に相次いで興った複数の王朝を

<sup>6</sup> 他の例としては以下の文献を挙げうる：*Bābur Nāmah* (1529-30年に成立；Bāburを扱う。以下略して記す)；*Qānūn-i Humāyūnī* (1534年以降；Humāyūn)；*TAK* (1579年以降；Akbar)；*Tārīḥ-i Šīr Šāhī* (1586年頃；Šīr Šāh)；*Ġahāngīr Nāmah* (1624年；Ġahāngīr)；*Ma‘ātir-i Ġahāngīrī* (1630年；Ġahāngīr)；*Hadiqat al-Salātīn* (1644年以降；‘Abd Allāh Quṭb Šāh)；*‘Āmal-i Šāliḥ* (1659/60年；Šāh Ḡahān)；*‘Ālamgīr Nāmah* (1668年以降；Awrangzīb)；*Ma‘ātir-i ‘Ālamgīrī* (1710年；Awrangzīb)；*Farruḥ Siyar Nāmah* (1713年以降；Farruḥ Siyar)；*‘Ibrat Nāmah* (1791年以降；Šāh ‘Ālam)；*Gulistān-i Raḥmat* (1792/3年；Ḥafīz Raḥmat Ḥān)。

取り扱う点で、これと区別される。その一例としてデリー地方の歴史を叙述する MT (1596年成立) を挙げる。この歴史書はガズナ朝のインド侵攻から説き起こし、デリー (ないしアグラ) に首都を置いた一連の諸政権の歴史をアクバル時代まで叙述するが、ムガル帝国の叙述はローディー朝の記事の直後に配置された初代君主パーブルの記事から開始されている。その結果、中央アジアにおけるパーブル以前のこの王家(ティムール朝)の歴史は捨象されてしまっている。この場合、叙述の焦点は特定の王朝ではなく、デリーという一つの地方に生じた一連の事件史である。<sup>7</sup> このような歴史叙述の方向性が、ある地方の通史的叙述へと通じるものであることは容易に理解できよう。

インド地方史における叙述の起点がどの時代に置かれるかは一定していないが、先述の MT のように、ムスリム政権以後の歴史に叙述を限定するものと、それ以前のイスラーム前史から説き起こすものとに大別できる。本論の関心はインド全体を叙述対象とする歴史書におけるインド・イスラーム前史にあるので、インド地方史におけるイスラーム前史は検討の対象とはならない。しかしインド地方史の中でも唯一、デリー地方の歴史を扱うもの (以下、デリー地方史と総称する) には、検討すべき特別な事情がある。それはデリー地方史に与えられた格別の地位である。後述するインド総合史、普遍史において、デリー地方史は叙述の筆頭に置かれるのが通例であり、かつ割かれる分量も多い。その背景には、インドにおける一連のムスリム政権が、ガズナ朝のインド侵攻を先駆けとして、デリー・スルターン朝によって本格的に始まる、という歴史認識がある。<sup>8</sup> この点で、デリー地方のイスラーム前史はインド・イスラーム前史

<sup>7</sup> 他の例としては以下の文献を挙げうる：*Tārīḥ-i Firūz Šāhī* (*Baranī*) (1357年に成立；デリー地方史。以下略して記す)、*Tārīḥ-i Muḃarak Šāhī* (1434年以降；デリー)、*Burhān-i Ma'āṭir* (1596年以降；デカン)、*Tārīḥ-i Ma'šmī* (1600/1年以降；スインド)、*Bahāristān-i Šāhī* (1614年以降；カシュミール)、KhT (1695/6年；デリー)、*Čahār Gulšan* (1759/60；デリー)、*Čahār Gulzār-i Šuġā'ī* (1786/7年以降；デリー)、*Riyād al-Salāṭīn* (1787/8年；ベンガル)。

<sup>8</sup> 筆者は先に、ガズナ朝をインドのムスリム政権の先駆けと見なす歴史認識の形成を、伝説上のガーズイー、サーラル・マスウードの逸話との関係で論じ、その時期を14世紀半ばに求めた [真下2008]。

に等しい重みを持つものと考えらるべきである。

ここで、インド地方史ばかりでなく、以下に述べるインド総合史および普遍史の類型に属する歴史書のいずれにも共通する特徴を指摘しておく。それは、各々の叙述が同時代に近い時代ほど手厚くなること、およびその叙述が必ず著者の同時代までをカバーすることである。そうだとすると、これらの特徴からは、同時代史から孤立した前代史が書かれることはない、という原則が導かれることになる。<sup>9</sup>インド・イスラーム前史はそれゆえ、単体ではなく必ず歴史書を構成するパーツの一つとして出現することになる。このようなパーツが歴史書に持ち込まれることの背景には、始原から同時代までを描く通史的叙述に通じる歴史認識が働いていることを見いだすことができるであろう。

#### (4) インド総合史

インド総合史の類型は、一定の空間に叙述対象を設定している点ではインド地方史と共通しているが、その対象がより広くインドとされている点、またその叙述のためにある独特の型式を備えている点において、インド地方史と区別すべきである。

この類型に属する最初の歴史書 TA (1594年成立)<sup>10</sup>の冒頭にある著者の言葉を以下に引く。

【著者は(筆者注。以下同)】若いときから、偉大なる父の指示に従い、能力保持者の知性を高め、見識保有者に教訓を与えてくれる歴史の書物を読むことに勤しんできた。【中略】複数の気候帯からなっており、測量士たちによると地上の6分の4をそれがカバーしているほどの広い国であるインド(Hindustān)とい

<sup>9</sup> 在来の典籍の翻訳として成立した歴史書はこの例外である。サンスクリット語で書かれたカシュミール地方の歴史書『ラージャタランギー』がアクバル時代にペルシア語に翻訳されたケースはこれにあたる。またスインドの地方史 *Čač Nāmah* も、これがアラビア語文献からの翻訳であるという主張が事実ならば、事例の一つに加えることができるだろう。

<sup>10</sup> 成立年代を初めとするこの書物の文献学的な諸問題については [真下1999] および [Mashita 2001] を見よ。

## インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

う大きな地域では、ほとんどの時期・時代において、この広大な国の各地方で、別々の統治者たちが主権を確立し、自ら王号を称して支配を行っていた。その時代の著述家たちはこれら諸地方の争奪や支配の状況について、もろもろの歴史書を著して、記録に残している。【中略】驚くべきことに、ある一地方の諸状況のすべてを集録した歴史書さえ、歴史の任務に携わる者たちの誰一人として、著していない。【中略】インド全域の諸状況を集録している歴史書についてはまったく聞いたことがない。しかるにいまやインド諸国の全地区・全地方が神のハリーフアたる陛下【ムガル帝国君主アクバルのこと】の世界征服の剣によって征服され、そのすべてが統一され、インド以外の多くの国のまでもが護られたる諸国のうちに加わり（これは偉大な王たちの誰一人としてできなかったことである）、7気候帯が安全保証を求めてかの陛下の幸福の旗幟の影に入ることが期待されるので、小生の心には浮かんだのは、インド諸国の諸状況のすべてを集録する歴史書を明瞭なことばで、セビュク・テギンの時代、すなわちインドの諸邦においてイスラームの興起が始まった【ヒジュラ暦】367年から、イラーヒー紀年（その始点は、神のハリーフアたる陛下の永遠へと連なる御即位である）の第37年に当たる1001年まで、章ごとに分けて、真正・公平の筆をもって記すことであった。<sup>11</sup>

以上の引用からは、叙述の対象としてインドという空間を設定した総合的な歴史書という目的意識と、そのような内容を備えた歴史書がこれまでに無いという問題意識を読み取ることができる。後者の問題点は史実に照らしても引用の通りであって、インド総合史という新たな歴史書の類型が、16世紀末のムガル帝国時代に明確な目的意識のもとに生み出されたことを確認しておきたい。<sup>12</sup>

ただし上の引用が述べているとおり、TAにおいて提示されたのは、あくまでムスリム政権成立以降の歴史であった。それゆえその歴史叙述はインド総合史というより、正確にはインド・イスラーム総合史というべきものである。これに対して、後述するとおり一部の歴史書は、TAにはない、インド・イスラーム前史という要素を備えている。この要素が加わることによって、イスラーム以降を扱う歴史叙述が、インドという空間を基準にした通史としてのインド史

<sup>11</sup> TA: i, 1-2.

<sup>12</sup> インド総合史の例は後出の〔表3〕に網羅的に取り扱っている。

インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

の体裁を獲得することになるのである。

さてインド総合史に独特の形式とは、上の引用の末尾にも記されているとおり、複数の「章」からなる構成を取ることである。[表1] にインド総合史の構成を、TA および GI (1606/7年以降成立) を例として示す。いずれの歴史書においても各章の内容がインド各地方の地方史であることから、インド総合史とは複数のインド地方史を束ねた集合体であることが判然としよう。各地方史の配列順に決まった原則は見られないが、インド・イスラーム前史が備わる

【表1】 インド総合史の構成例  
(括弧内の数値は、校訂本の全頁数に占める当該部分の所要頁数の割合)

| <i>Ṭabaqāt-i Akbarī</i> (TA) | <i>Gulshan-i Ibrāhimi</i> (GI)<br>(TAの構成に対応させるべく、章順不同) |
|------------------------------|--|
| 序文 (0.4%)                    | 総序 (0.4%)  |
| ガズナ朝 (2.2%)                  | 序文 (1.5%)  |
| デリー諸王 (59%)                  | ガズナ朝 (3.9%)  |
| デカン諸王 (5.8%)                 | デリー諸王 (27.8%)  |
| バフマニー朝 (4.1%)                | デカン諸王 (36.7%)  |
| ニザーム・シャーヒー朝 (0.8%)           | バフマニー朝 (13.9%)   |
| アーデイル・シャーヒー朝 (0.4%)          | ニザーム・シャーヒー朝 (9.7%)                                     |
| クトゥブ・シャーヒー朝 (0.1%)           | アーデイル・シャーヒー朝 (11.7%)                                   |
| グジャラート諸王 (12.6%)             | クトゥブ・シャーヒー朝 (0.9%)                                     |
| ベンガル諸王 (0.9%)                | イマード・シャーヒー朝 (0.2%)                                     |
| シャルキー朝諸王 (1%)                | バリード・シャーヒー朝 (0.2%)                                     |
| マールワ諸王 (10.4%)               | グジャラート諸王 (7.2%)  |
| カシュミール諸王 (5.9%)              | シャルキー朝および東国 (ベンガル) の諸王 (0.9%)                          |
| スインド諸王 (1.1%)                | マールワ諸王 (5.4%)  |
| ムルターン諸王 (1.7%)               | ハーンデーシュ諸王 (1.8%)                                       |
|                              | カシュミール諸王 (4%)  |
|                              | スインド諸王 (1.5%)  |
|                              | ムルターン諸王 (0.9%)   |
|                              | マラバール諸王 (0.7%)   |
|                              | インドの聖者列伝 (5.7%)  |
| 跋文 (0.1%)                    | 跋文 (0.5%)  |

場合、これは当然ながら、序文などのかたちで著作の冒頭に配置される。またすでに述べたとおり唯一デリー地方史のみは、いかなるインド総合史においても各地方史の最初に配置されるのが原則である。デリー地方史に与えられたこの格別な地位は、デカンのムスリム王朝アーデイル・シャーヒー朝の君主に献呈されたGIにおいてさえ、相当の分量がデリー地方史に割かれていることから確認することができる。

最後にかなり独特の形式を備えた一つの著作をこの類型に加えておきたい。それはムガル帝国君主アクバル時代の欽定史ANの最終冊である所謂AA(1595-96年成立)である。ANの一部であることに鑑みれば、この作品は王朝史に分類されることになるが、その内容は行政、軍事、宮廷内務などの諸制度やインド在来の宗教や学術など多岐にわたっている。本論に関係するのは、ムガル帝国諸州の財務・軍務統計を含む地誌の部分であり、一部の州についてはそこに記述された簡単な歴史叙述が、インド・イスラーム前史を備えているのである。本論の考察においては、州(地方)に区分された歴史叙述の集合体というその形態に鑑み、本書AAをインド総合史の亜種として扱うことにする。

## (5) 普遍史

普遍史とは、叙述の対象を全世界にまで拡大して、「人類創世から同時代にいたる人類史」<sup>13</sup>を叙述する類型であり、その内実は世界諸地域の民族史、王朝史の集合体である。前近代イランの普遍史が備えている形式上の特徴については守川知子氏がまとめている。それらは、イラン特有の事情に由来する事項

<sup>13</sup> [大塚 2007: 82].

<sup>14</sup> [①イスラーム以前の歴史は、天地創造と、「預言者伝」と「帝王伝」からなり、イスラーム以後の歴史は、預言者ムハンマド、正統カリフ時代、ウマイヤ朝、アッバース朝とつづく「王朝史」が主体である。②「帝王伝」の記述は、サーサーン朝時代に正史として編まれた『主の書』の伝統を受け継いだものであり、創造、ビーシュダード朝、カヤーン朝、アシュカーン朝、サーサーン朝という、サーサーン朝期の歴史観を踏襲する。ただし、ここにはバビロンやイエメンの王の記述も含まれる。③イスラーム時代とそれ以前はひとつの区分をなす。④イスラーム以前の預言者伝や帝王伝も

(⑥、⑦)を除けば、本論が対象とするインドの普遍史についてもおおむね当てはまるので、ここでは説明を繰り返さない。

普遍史の中でインド史が占める位置を、ムガル帝国時代に書かれた *Rawḍat al-Ṭāhirīn* の構成を例として示す [表 2]。この書物の中で、インドの歴史に関係する箇所は点線で囲った 3 箇所である。このうち第 2 部第 4 章第 5 節、第 3 部第 6 章第 2 節はきわめて簡略な記事を書き載せるのみであり、第 5 部の記事を補う情報を持たない。インドで書かれた普遍史において、これら 2 箇所のような叙述は異例であるから、これらは考慮に値しない。要するにこの普遍史の中で、インド史は第 4 部および第 5 部によって構成されているわけである。

第 4 部の内容は次章で検討するので、ここでは触れないが、第 5 部の構成と内容が前述のインド総合史と同じであることは明らかである。すなわち第 1 章～第 3 章でデリー地方史を叙述したあと、第 4 章の各節で各地方史を叙述しているのである。そう考えれば、第 5 部に対して第 4 部はそれに先立つインド・イスラーム前史としてこの歴史書では位置づけられていることがはっきりする。

インドで書かれた普遍史はこのように、著作の最後尾にインド総合史をはじめ込むことによって、インド史のパーツを構成するのが通例である。インドで書かれた普遍史においてインド史が最後に来るのは、歴史叙述が著者の同時代史に至るという原則に従う結果である。以上により、普遍史もインド総合史同様、インド・イスラーム前史の要素を検討すべき対象となる。<sup>15</sup>

---

ㄨは、先行する書物の焼き直しであり、記述内容にほとんど変化が見られない。場合によっては、歴代諸王の名前のみを列挙する史書もある。⑤トルコ系・モンゴル系の王朝時代を経ても、叙述スタイルに変化は見られない。ちなみに、チンギス・ハーンの家系を重視したティムール朝期の普遍史では、モンゴル史はティムール朝史の直前に付加され、その後はこのスタイルが踏襲された。⑥マムルーク朝やオスマン朝、ムガル朝の歴史は触れられない。⑦16世紀にサファヴィー朝が成立し、シーア派を国教と定めて以降は、王朝の書記たちによって書かれる普遍史では、ムハンマドの次に12人のシーア派イマームの事績が記される」[守川 2010: 13].

<sup>15</sup> 普遍史の類型に属する歴史書は後出の [表 3] で網羅している。

[表2] *Rawḍat al-Ṭāhirin* (RT) の構成 (Ms. British Library, Or. 168 による)

序 文 (7 ff. 所要フォリオ数。以下同)

第1部 (243 ff.)

- 第1章 預言者たち、賢者たち
- 第2章 古代イランの諸王
- 第3章 イスラーム以前のアラブの諸王

第2部 (52 ff.)

第1章

- 第1節 正統カリフ
- 第2節 ハサン以降のイマーム

第2章

- 第1節 ウマイヤ朝
- 第2節 後ウマイヤ朝

第3章

- 第1節 アッバース朝
- 第2節 アッバース朝の後継者  
ターヒル朝、アグラブ朝、トゥールーン朝、イフシード朝、  
ハムダーン朝

第4章

- 第1節 サッフアール朝
- 第2節 サーマーン朝
- 第3節 ガズナ朝
- 第4節 ゴール朝

第5節 ゴール朝の後継者

【ユルドゥズからアラール・アッディーンまで。記述は簡略】

- 第6節 カルト朝
- 第7節 ダイラム人王朝
- 第8節 イラン、ケルマーン、ルームのセルジューク朝
- 第9節 セルジューク朝の後継者、ホラズム・シャーヒー朝
- 第10節 アターベク、アイユブ朝
- 第11節 ケルマーンのカラヒタイ
- 第12節 マグリブ、イランのイスマール派

第3部 (127 ff.)

- 第1章 チングイズ・ハーン以前のトルコ諸王
- 第2章 モンゴルについて

インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

第3章

- 第1節 チンギズ・ハーン、およびイランにおける後継者たち
- 第2節 チンギズ・ハーンの子孫たち  
オゴタイ、チャガタイ、ジュチ、シャイバーニー朝、トゥルイ
- 第3節 【無題】
- 第4節 チンギズ・ハーン諸王朝の後継者  
チョパン、イルハン朝、ムザッファル朝、サルバダール朝

第4章 中国諸邦 (mamālik-i Hitāy)

第5章 オスマン朝

第6章 ティムール朝

- 第1節 ティムールとその後継者たち

- 第2節 ウマル・シャイフの後継者たち【アクバルまで。記述は簡略】

- 第3節 カラ・コユンル、アク・コユンル

第7章 サファヴィー朝

第4部 (98 ff.)

第1章 ヴィシュヌのアヴァターラ

第2章 マハーバーラタ要約

第5部 (177 ff.)

第1章 デリー諸王【ゴール朝の征服～ローディー朝～バーブル～フマユーン～スール朝～アクバル即位】

第2章 アクバル時代史

第3章 アクバル宮廷詩人伝

第4章

- 第1節 スインド
- 第2節 ムルターン
- 第3節 カシュミール
- 第4節 グジャラート
- 第5節 マールワ
- 第6節 デカン   バフマニー朝  
                  ニザーム・シャーヒー朝  
                  アーディル・シャーヒー朝  
                  クトゥブ・シャーヒー朝
- 第7節 シャルキー朝
- 第8節 ベンガル
- 第9節 ベンガル地方の島や港

跋文

(6) 世界年代記

世界年代記はヒジュラ暦ないしそれに準ずる暦によって<sup>16</sup>、その元年から編年的に叙述する年代記である。本論が対象とする時期にインドでは3点の世界年代記が書かれた。この類型は当然、インドにムスリム政権が確立する以前の歴史をカバーしていることになるから、インド・イスラーム前史の有無を調査する必要がある。

(7) 民族史

民族史とは特定の民族集団を対象とする歴史書の類型であり、叙述の対象が特定の地域や王朝ではない点で、他の類型と区別できる。インドではアフガン人についてこの類型に属する歴史書が書かれた<sup>17</sup>。アフガン人の伝説的な起源から説き起こし、インドにおけるアフガン諸族の系譜を叙述するこれらの書物は、[Storey 1927-39] が分類するような「アフガニスタンの歴史」という特定の地域に根ざした歴史書ではなく、アフガン人の建てたローディー朝やスール朝の叙述に終止している王朝史でもない。

アフガン人の民族史はインド・イスラーム前史の要素を備えるべくもないので、本論における調査の対象外にある。しかしその民族史の叙述が、次章の考察から引き出されるインド・イスラーム前史との関係において重要な意味を持つことをここでは指摘しておきたい。

以上の検討によって、インド・イスラーム前史の要素を抽出するために調査すべき歴史書の類型は(3)インド地方史のうちのデリー地方史、(4)インド総合史、(5)普遍史、(6)世界年代記となる。

<sup>16</sup> アクバル時代には、預言者ムハンマドの死去の年を元年とする太陰暦、リフラ暦を用いて *Tārīḥ-i Alfī* (1594年以降成立) が書かれた。

<sup>17</sup> *Tārīḥ-i Ḥān-i Ġahānī wa Maḥzan-i Afġānī* (1613年成立); *Ḥulāṣat al-Ansāb* (1770年成立)。

<sup>18</sup> [Storey 1927-39: 393-95].

## (B) 調査対象の網羅

以上の類型に属する個々の歴史書のうち18世紀末までに著作されたものを、[Storey 1927-39]等の書誌を参照して選び出すと、[表3]の通り、64点の文献からなる一覧が得られる。これらの歴史書の著述言語は *Zafar al-Wālih* (アラビア語)を除いて、すべてペルシア語である。

著作年代の分布を見ると、64点のうち55点が1590年代以降に成立していることが分かる。これは16世紀後半以降のインドにおけるペルシア語文化の発展という全般的な傾向に符合している。とくに1590年代という始点における突出した著作の多さはアクバル時代のムガル帝国における歴史学の活況を反映している。

64点を類型別に見ると、わずか3点しか現れなかった世界年代記を別とすれば、いずれの類型も特定の時代に偏った分布を示してはいない。インド総合史、普遍史、デリー地方史のいずれもが、当該の時代に一般に普及し、生産され続けた歴史書の類型であったことは明白である。ただし注意すべきは、作品の数においては、これらの類型に比して、王朝史、一代史、地方史といった他の類型がはるかに多数の作品を擁していることである。このことは [Storey 1927-39] に挙げられた著作の数を集計すれば明白である。もちろん歴史書の流行は作品の数ばかりでなく、写本の数によっても計られる必要があるので、性急な判断は避けねばならない。とはいえ本論で扱われる4つの類型が備えていた包括的な通史的叙述の一方で、個別の地域、王朝、人物に関する断片的な歴史叙述に対する需要もあったこと、このような歴史叙述の所産が一段と増加する18世紀がムガル帝国の解体という政情と期を一にして生じていることには留意する必要がある。

なお64点の歴史書の全てについて、その執筆の経緯をつまびらかにできるわけではないが、著者の経歴などをあわせて検討すると、多くの場合、著作の行われた環境をおおよそ知ることができる。そうするとこれらの多くが、ムガル帝国の君主に献呈されたり、その宮廷に出仕していた人物による著作であった

インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

【表3】

「成立年代」：n/n+1 はビジュラ暦年が二つの西暦年に跨っていることを意味する。n・\* は当該年以前の成立であること、\*・n は当該年以前の成立であることを意味する。  
 「分類」：略号の意味は次の通り。D: インド地方史 (デリー)。IG: インド総合史。WC: 世界年代記。WG: 普通史。

| 成立年代               | 書名                                      | 分類 | インド・イスラーム前史 |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
|--------------------|---|----|-------------|-----|-------------------|-----|-------------|-----|-----------|-----|------------------|-----|-------------|--------|-------|--|
|                    |   |    | 1) 創世       |     | 2) マハーバーラタとパンダヴァ族 |     | 3) 十のアヴァターラ |     | 4) インド人子孫 |     | 5) インド地誌のイスラーム前史 |     | 6) インド来訪者列伝 | 7) かの所 | 8) テク |  |
|                    |   |    | (a)         | (b) | (c)               | (a) | (b)         | (c) | (a)       | (b) | (c)              | (d) | (e)         |        |       |  |
| 1 1259-60          | <i>Tabaqāt-i Nāsiri</i>                 | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 2 1349/50          | <i>Futuḥ al-Salātīn</i>                 | D  |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 3 1357-*           | <i>Tārīḥ-i Firūz Shāhī</i>              | D  |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 4 1434-*           | <i>Tārīḥ-i Mubarak Shāhī</i>            | D  |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 5 1438/39-*        | <i>Tārīḥ-i Muḥammadī</i>                | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 6 1499/1500        | <i>Tabaqāt-i Mahmūd Shāhī</i>           | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 7 1501/02-*        | <i>Tārīḥ-i Sadr-i Gahān</i>             | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 8 1550/51-*        | <i>Tārīḥ-i Ibrāhīmī</i>                 | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 9 1562/63-*        | <i>Tārīḥ-i Īlā-i Nizām Shāh</i>         | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 10 1590/92-1599/94 | <i>Maḡāmi al-Aḥbār</i>                  | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 11 1594-*          | <i>Tārīḥ-i Aḥlī</i>                     | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 12 1594            | <i>Tabaqāt-i Akbarī</i>                 | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 13 1595-96         | <i>Ān-i Akbarī</i>                      | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 14 1596            | <i>Muntahab al-Tawārīḥ</i>              | D  |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 15 1596/97         | <i>Tārīḥ-i Haqqī</i>                    | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 16 1605-*          | <i>Zaḥar al-Wāḥ bi-Muzaḥfar wa Aḥlī</i> | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 17 1605-*, 1616    | <i>Zubdat al-Tawārīḥ</i>                | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 18 1605/06-*       | <i>Rawdat al-Tahīrīn</i>                | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 19 1606/07-*       | <i>Gūḡān-i Ibrāhīmī</i>                 | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 20 1611-*, 22      | <i>Mādan-i Akbarī-ī Ahmādī</i>          | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 21 1612/13         | <i>Muntahab al-Tawārīḥ</i>              | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 22 1617            | <i>Maḡāyir-i Raḥīmī</i>                 | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 23 1618/19         | <i>Tārīḥ-i Haydarī</i>                  | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 24 1626/27         | <i>Anfā al-Aḥbār</i>                    | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 25 1628/29         | <i>Maḡālis al-Salātīn</i>               | IG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 26 1638/39         | <i>Subḥ-i Sādiq</i>                     | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 27 1642/43-*       | <i>Tirz al-Aḥbār</i>                    | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 28 1646/47         | <i>Muntahab al-Tawārīḥ</i>              | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 29 1654-*          | <i>Afṣaḥ al-Aḥbār</i>                   | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |
| 30 1665/66-*       | <i>Tuḥfat al-Aḥbār</i>                  | WG |             |     |                   |     |             |     |           |     |                  |     |             |        |       |  |



りするなど、何らかのムガル帝国の環境の中で作成されたことが判明する。なかにはデカンのムスリム政権のもとで書かれたものもあるが、GIの事例について後述されるとおり、そのいずれもがムガル帝国における歴史叙述の所産に多くを負っていることは明瞭である。ただし18世紀後半以降には、ムガル帝国の後継王朝（ラクナウーないしベンガルのナワーブ政権）の君主や英国人のために執筆されたものが現れてくる。これがムガル帝国の解体という政治状況に並行した現象であることは容易に理解できよう。<sup>19</sup>

## 2. インド・イスラーム前史の要素

本章では、前章において調査対象として特定された、デリー地方史、インド総合史、普遍史、世界年代記の類型に属する歴史書64点から、インド・イスラーム前史を構成する要素を抽出する。

これらの文献は次のようにして調査に付した。公刊されている文献については公刊版によってその内容を調査した。[表3]下の参照情報の項には、公刊版の書誌情報を挙げてある。一方公刊されていない文献については写本調査を行った。ただし調査の前段階として大英図書館等の写本カタログやエリオットの英訳史料集 [Elliot & Dowson 1867-77] の詳細な記述を参照し、その結果インド・イスラーム前史の要素を含んでいないことが確認できた文献は調査に付さなかった。このケースにあたる文献には、参照情報の項において、角括弧を付して写本カタログ等のリファレンスを挙げた。そのうえで写本カタログ等の情報から、インド・イスラーム前史の要素を含んでいることが確実である文献、ないし含んでいる可能性を排除できない文献について写本調査を行った。参照情報の項には、調査した写本のアクセス番号を挙げた。ただし文献学的な

<sup>19</sup> この時期、英人の委嘱によって書かれたペルシア語の歴史書については [Sarkar 1982: 4-7]。これらの歴史書の背景にあった、インド史、インド社会に対する東インド会社の関心と情報収集の状況については [Bayly 1996] が詳細な検討を加えている。

本文批判は本論の主眼ではないので、必ずしも最優等の写本を調査できたわけではない。また、調査すべきであるにもかかわらず、本稿執筆までに調査できなかったものが5点あり、それらは「調査不全」の列に「△」ないし「×」で表示されている。「△」は今後、有意の写本にアクセスできる可能性があることを意味し、「×」は当該箇所を含む写本が現存していないために当面、その内容に関する調査をなし得ないことを意味する。調査不全故にインド・イスラーム前史の有無が確認できないものは当該欄に「？」が付される。一方調査不全にもかかわらず、内容に関して一定の判断を下せたのは (nos. 54, 58)、参照情報に挙げた写本カタログ等の解説のおかげである。これら5点の不備は、本論の主旨にはさしたる影響がないものと筆者は考える。

さて調査の結果、抽出されたインド・イスラーム前史を構成している要素を整理すると、大まかに次の8つにまとめることができる。各々の要素にはアラビア数字と右丸括弧によって番号付けした。要素を細分類する場合には、各々を事項と呼び、英小文字と丸括弧によって整理した。以下では各々の要素の内容を、原則として初出の文献に即して記述する。

## 1) 創世

インド・イスラーム前史の要素として、創世に関する叙述は大きく分けて3つの事項を含んでいる。

### (a) 4つのユガ

第一は、人類史を構成する4つの時代 (dawr) である。それによると第一の時代サタ・ユガ (sata-yuga)<sup>20</sup> は1728000年にわたり、これに第二のトレーター・ユガ (trītā-yuga) が1296000年、第三のドゥヴァーパラ・ユガ (dwāpara-

<sup>20</sup> 通常は「クリタ・ユガ」とされる用語であるが、本論で参照した文献群においてはほぼ例外なく「サタ・ユガ」の語形を取っている。なお以下、インド諸語に由来する術語、固有名詞については、可能な限りインド学で一般的なカタカナ表記によって記し、必要に応じて典拠におけるアラビア文字表記をローマ字転写によって付した。

yuga) が864000年、第四のカリ・ユガ (kali-ḡuga) が432000年にわたって後続し、カリ・ユガが満了すると、人類史はサタ・ユガに循環する、とされる。<sup>21</sup> この事項を記述する文献はしばしば、執筆当時のヒジュラ暦年をカリ・ユガ開始からの積年に換算する。<sup>22</sup> 以上の4時代区分説が、インドの古典籍に見られる4ユガ説を踏まえたものであることは言うまでもない。しかしこれらの史書の直接の典拠を特定する作業は、本論の主たる目的には関わりないので立ち入らない。以下に続く要素・事項についても同様である。

(b) 5元素

これに続く第二の事項は、神 (ḥadrat-i bārī) が最初に創造したのが5つの元素 ('unṣur) である、というものである。そのうち4つは「周知」のとおりであるといい、第五の元素として空 (akās) の語を挙げ、その語釈として āsmān (空) というペルシア語を当てる。<sup>23</sup> 「周知」とされた4元素は無論、イスラームの古典籍に一般的な4元素すなわち土、水、空気、火である。

(c) ブラフマー

第三の事項は次の通りである。すなわち、5元素の後に神がブラフマー (brahmā) という者を創造したこと、そしてブラフマーを「被造物の創出の仲介、世界の創造の手段」としたこと、ブラフマーが神の許しを得て人間 (insān) を出現させ、これをバラモン (brahman)、クシャトリヤ (khatrī)、ヴァイシヤ

<sup>21</sup> GI: i, 6-7.

<sup>22</sup> 換算の数値にしばしば生じる齟齬の理由は不明である。GIは執筆当時のヒジュラ暦1015年(西暦1606/7年)をカリ・ユガの第4684年とする一方(GI: i, 7)、RTはヒジュラ暦1011年(西暦1602/3年)が第4685年にあたるとする(RT: 467v)。この換算は早くもJTの「インド史」に見えるが、そこではヒジュラ暦703年(西暦1303/4年)がカリ・ユガの第5379年に当たるとされている(JT: 4)。なお伝統的なインド天文学において、カリ・ユガ暦元はユリウス暦紀元前3102年2月18日に相当するという[矢野編 1980: 30, 39-40, 90-91]。

<sup>23</sup> GI: i, 7.

(baysa)、シュードラ (sūdra) の4つの集団に分けたこと<sup>24</sup>。

## 2) 『マハーバーラタ』とパンドヴァ族

この要素は大まかに3つの事項に細分類できる。すなわち叙事詩『マハーバーラタ』からの借用によって成り立っている事項 (a) および (b) と、『マハーバーラタ』の主役パンドヴァ族 (Pāndav-ān) 王家のその後の王統を述べる事項 (c) である。

(a) は、パンドヴァ族の王パンドウ (Pānd) への呪いと王子たちの誕生の物語である。パンドウは狩りに出た折、鹿の姿で妻と交わっていた隠者 (ābid) を誤射してしまった。隠者は、王が女と交わった途端に死ぬようにとの呪いをかけた後に絶命した。子を持ってないことを憂えた王の願いを受けて、2人の妃クンティー (Kuntī) とマードウリー (Mādri) は、天上界 (‘ālam-i malakūt) のものと交わって、それぞれ3人、2人の息子をもうけた。前者は、ユディシュトラ (Īudīstra)、ビーマセーナ (Bhīma Sīna)、アルジュナ (Arġuna)。後者は、ナクラ (Nakula)、サハデーヴァ (Sahadiwa) であった<sup>25</sup>。以上の概略によって示した物語は『マハーバーラタ』原典第一巻109-116章の所伝におおむね対応する<sup>26</sup>。

(b) は、『マハーバーラタ』の主題である、パンドヴァ族とカウラヴァ族 (Kawraw-ān) との18日戦争の顛末である。長兄ユディシュトラをはじめとするパンドヴァ族の強勢を恐れたカウラヴァ族のドゥルヨーダナ (Īur-ġūdhana) は数々の陰謀を弄した挙句に、いかさま賭博をもちかけた。賭博に敗れたパンドヴァ族は、約束により国を明け渡し12年にわたって国外を放浪した。その後、パンドヴァ族は国の返還を求めたがドゥルヨーダナが応じ

<sup>24</sup> GI: i, 7-8.

<sup>25</sup> KhT: 89-90. この要素の初出であるKhTは典拠として、アクバル時代に作成された『マハーバーラタ』のペルシア語訳を挙げているが (KhT: 6)、上記の所伝とペルシア語訳と完全には一致しない (MBh: i, 99-100)。

<sup>26</sup> [MBh 上村訳: 1, 390-409].

なかったため、18日にわたる戦争が勃発した。これはカリ・ユガの初頭のことである。激戦の結果、バーンダヴァ族が勝利したが、両軍の生存者はユディシュトラら五兄弟を合わせて12名に過ぎなかった。ユディシュトラはその後36年間統治した後、兄弟とともに世俗を捨てて、身罷った<sup>27</sup>。以上の物語も、おおむね『マハーバーラタ』原典の物語をトレースしているが、例えば、戦争の生存者を原典が10名とするところを、上の所伝が12名としているなど、ディテールの齟齬は散見される。

(c) は、バーンダヴァ族5兄弟の一人アルジュナの子孫とそれに続くデリーの諸王家の系譜である。各々の王家の初代が登場するに至る経緯が簡略に述べられる他は、王名とその在位期間が羅列されるに過ぎない。この叙述は、アルジュナの子アビマニユ (Abhimanu) の子バリクシット (Pariśhit) から始まり、その子ジャナメージャヤ (Ġanamġaya) の後、この王統がユディシュトラから数えて30代1739年3ヶ月16日にわたって続いた後に滅亡したと述べる。その後、異なる王統が14代500年2ヶ月23日にわたり、続いて16代430年5ヶ月24日、9代359年11ヶ月27日、16代385年5ヶ月20日、10代119年11ヶ月9日、4代49年11ヶ月25日、12代149年11ヶ月11日、6代107年7ヶ月と王統が替わった後、ラーイ・ピタウラー (Rāy Pithawrā) の創始した王統は、第五代 Rāy WHYBL (?) がゴール朝シハーブ・アッディーンに敗れたことによって絶えた (5代86年10日)。これ以降の本文は、後続するデリーのムスリム君主をムガル帝国シャー・ジャハーンまで列挙する<sup>28</sup>。以上のうち、『マハーバーラタ』原典に言及されているのはジャナメージャヤまでであり、これをいわば糊しろとして、この物語全体が『マハーバーラタ』続編を呈する結果となっている。史実ではシハーブ・アッディーンが破ったのはラーイ・ピタウラー本人であるから、この所伝の史実性はさしあたり問題とするに値しない。むしろここではこの所伝が、『マハーバーラタ』の時代からムスリム政権にいたる一連の諸王

<sup>27</sup> GI: i, 9-13.

<sup>28</sup> RW: 83r-110r.

家を描くことによって、インド・イスラーム前史とムスリム到来以後の歴史とを接続させるべく働きを帯びている点に注意すべきである。

### 3) 10のアヴァターラ

この要素は、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神が帯びる10の化身（アヴァターラ）の神話を転用した叙述である。文献への現れ方に鑑みて、ここでは10のアヴァターラに対する全般的な言及と、長大な所伝が割かれる2つのエピソードの、つごう3つの事項に分けて整理する。

#### (a) 全般的な言及

アヴァターラの全体像について言及している RT は次のように叙述を説き起す。「かつて反乱・反抗の徒が猖獗を極めていた頃、彼らの鎮圧のために完全性の持ち主が出現した。この完全性の持ち主の発現をアヴァターラ (awatāra) という。創造の最初から終末までに12 (ママ) のアヴァターラがある」。<sup>29</sup>ここに「12」とあるが、実際に叙述されるのは次の通り10のアヴァターラの物語である。1. 魚 (māhi)、2. 猪 (hūk)、3. 亀 (kaśaf)、4. 人獅子 (nara-singha)、5. pūrṇah (?)、<sup>30</sup>6. パラシュラーマ (Parasurāma)、7. ラーマ (Rāma)、8. ブツダ (Būdah)、9. クリシュナ (Kiśan)、10. カルキ (KLNKY (ママ < Kalki))。<sup>31</sup>以上の10のアヴァターラの顔ぶれは、第五のアヴァターラを除き、『バーガヴァタ・プラーナ』などのヴィシュヌ派文献に見られる一般的なものと同じであるが、その直接の典拠は不明である。<sup>32</sup>なお AA にもアヴァターラについての記述

<sup>29</sup> RT: 427r.

<sup>30</sup> アヴァターラの名称としての pūrṇah (< pūrṇā. ヒンディー語で「満ちた」を意味する形容詞) は意味不明である。本来なら AA の如く、「侏儒」を意味する bāmana < vāmana の語が望ましい (AA: ii, 167)。RTの当該箇所は pūrṇah āftāb awatār と作ったうえで、āftāb の語に取消線とおぼしき線が記入されており、問題を複雑にしている (RT 428v, l. 18)。

<sup>31</sup> RT: 427r-467r.

<sup>32</sup> 『バーガヴァタ・プラーナ』の記事については [上村2003: 265-92] に拠った。なおサンスクリット語典籍のペルシア訳を RT の著者が集録した写本が大英図書館にある (IO ISLAMIC 753)。これには『バーガヴァタ・プラーナ』の抄訳、『マハーバーラタ』の梗概、『マハーバーラタ』の補編『ハリヴァンシャ』の抄訳が含まれる。

があるけれども、それは歴史叙述の一環としてではなく、インドの宗教事情を概説する記事の一部として現れる。<sup>33</sup>このような文脈の違いのみならず、その記述がRTの所伝における猪と亀、ブツダとクリシュナの順序を逆にしているという内容上の差異からも、AAの所伝は上記のものとは別のヴァリエーションとして扱うべきである。

インド古典の数多ある物語の中から、このアヴァターラの物語を歴史叙述の一部として著作に組み込んだ理由について、史料は何も述べていない。RTの場合、著者がアヴァターラの物語を『マハーバーラタ』のエピソードの一部と理解していたようなので、<sup>34</sup>『マハーバーラタ』を引用しているRTの著者にとつて、アヴァターラの物語を引用することに特段の意味はなかったかもしれない。ただアヴァターラの物語では、10番目の化身カルキがカリ・ユガの末期に現れて世界に蔓延る悪を一掃した後、4つのユガは終末を迎え、正道の時代である第一のサタ・ユガに回帰することになっているので、人類史に区切りを与える一種の終末論の資料として、一連の物語を著者が理解した可能性はある。<sup>35</sup>

さらに、アヴァターラの物語が古典籍の受容という学術上の営みに留まらず、16世紀後半のムガル帝国の宮廷周辺で一般にかなり普及していたことも、この要素をRTの著者が取り入れる十分な理由になったであろう。そのような流行の一端は、イエズス会士が伝えてくれている。すなわち1580年から82年にかけて宮廷に滞在した第一次ミッションの一員モンセラテはアヴァターラの物語を記録している。<sup>36</sup>また第三次ミッションの一員ハビエルは1598年ラホールで記

、[Ethé 1903: 1092]。筆者はこの写本を調査していないので断言できないが、この『バーガヴァタ・プラーナ』抄訳はRTのアヴァターラの叙述と密接な関係を持つ可能性が高い。ただし『バーガヴァタ・プラーナ』ペルシア語訳は複数知られており、それらとこの抄訳との関係についてはさらなる調査を要する。

<sup>33</sup> AA: ii, 164-170.

<sup>34</sup> RT: 427r.

<sup>35</sup> イスマーイル派の一派ニザール派のインドにおける一派サトバント派が、世の終末に諸悪を糺すべく白馬に乗って到来するとされるこのカルキに、シーア派イマーム、アリーを重ね合わせていることが指摘されている [Schimmel 1982: 16, 31, plate x xxix]。

<sup>36</sup> Monserrate: 586-87 (J tr., 78-80).

した書簡に、アヴァターラの説を紹介した上で、帝王アクバルこそ第10番目の化身である、という俗説さえ行われていたことを報告している。<sup>37</sup>

(b) ラーマのエピソード

これは第七のアヴァターラ、ラーマの物語であり、RTのみに現れる特有の事項である。その内容は『ラーマーヤナ』の要約であり、RTにおいて10のアヴァターラの叙述全体のほぼ半分を占める大規模な記事である。<sup>38</sup>『ラーマーヤナ』には複数のペルシア語訳が存在するが、そのうちの一つがアクバル時代に作成されているので、ムガル帝国の宮廷にいた著者がこれを情報源として利用できた可能性がある。<sup>39</sup>

(c) クリシュナ・ヴァースデーヴァ (Bas-dīwa) のエピソード

これは、マトウラーの王ヴァースデーヴァ (Bas-dīwa) の子で、クリシュナ神の化身であるヴァースデーヴァと、彼のおじカンサ (Kansa) との確執から説き起こされる物語である。これは10のアヴァターラの第九に配置されており、RTでは、ラーマのエピソードに次ぐ規模を備えた記事をなしている。<sup>40</sup>全体としては『バーガヴァタ・プラーナ』などのクリシュナ説話と並行する部分を備えているが、直接の典拠は不明である。なお別系統の伝承として、クリシュナ・ヴァースデーヴァ以降、ガズナ朝の征服までの歴史を叙述するものがある。これは後述のごとく要素8)として整理した。

<sup>37</sup> J. Oranus, *Japonica Sinencia Mogorana*, Leodii, 1601. この版本には頁番号がないので、同じ書簡を転載している以下の著作によって参照情報を示す: [Hay: 874]. ハビエルの書簡については [Camps 1957: 39-50]。なおアーンスト氏はこの俗説をRTの所伝の結果と見ているが、1598年の俗説は1605/6年以降に成立した歴史書の結果たり得ない。同氏はパーチャス『世界旅行記大成』(S. Purchas, *Purchas his pilgrimage*, London, 1613) の節略版 (J. T. Wheeler (ed.), *Early travels in India*, Calcutta, 1864) に拠ったために、この俗説の年代を誤認したのであろう [Ernst 2003: 183]。

<sup>38</sup> RT: 430r-449v.

<sup>39</sup> AA: i, 115. このペルシア語訳のテキストは未公開であり、RTの所伝との関係については別の機会に譲る。なお『ラーマーヤナ』のペルシア語訳のヴァージョンについては [榊 1994: 87-8] によって整理されている。

<sup>40</sup> RT: 450r-467r.

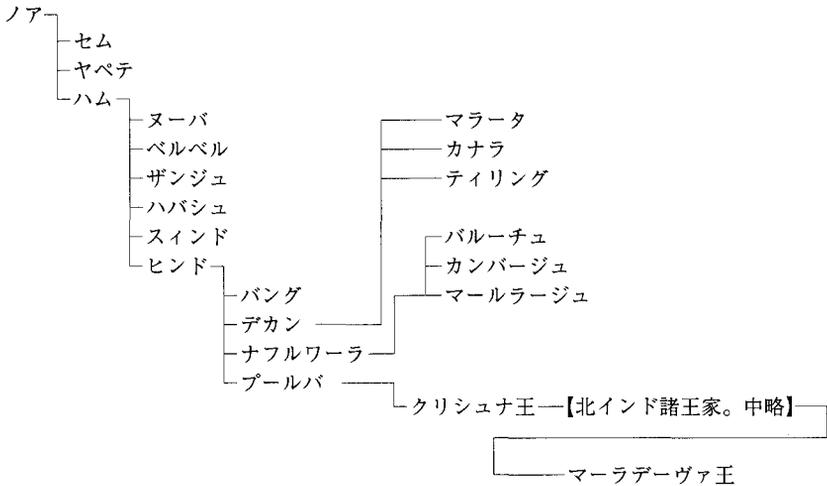
4) インド人ハム子孫説

この要素の内容は、インド人の起源を旧約聖書的な民族史に結び付ける叙述である。ここではそれを大きく2つに整理する。

(a) ノア～ハム～クリシュナ (Kišan) 王

所伝の内容は大略、次の通りである。ノアには3人の息子、セム、ハム、ヤベテがいた。洪水の後、ノアは3兄弟を地球上の各地に送りだした。ハムは「南方の土地」に向かい、その国の開発に従事した。彼には6人の子供すなわちヒンド、スインド、ハバシュ、ザンジュ、ベルベル、ヌーバ<sup>41</sup>が生まれた。彼らの名に因んで、各々の諸国に名が付いた。ヒンドには4人の息子、プールバ、バング、デカン、ナフルワール<sup>42</sup>が生まれた。それぞれ諸国を開発し、各国に各人の名が付いた。デカンには3人の息子、マラータ、カナラ、ティリング

【図1】 GI: i, 15-27 による。



41 ザンジュ (Zang), ベルベル (Barbar), ヌーバ (Nubah) とした箇所を GI の版本はボンベイ版、テヘラン版とも、それぞれ Afrang, Buyah, Hurmuz と誤って作る。Ms. Add. 18875, British Library, f. 13v/5 によって正した。

42 GI の当該部分をボンベイ版は KHNR、テヘラン版は Katehr とするが、Ms. Add. 18875, British Library, f. 13v/11 によって、Kanara と読んだ。

が生まれ、ナフルワールにも3人の息子、バルーチュ、カンバージュ、マールラージュが生まれた。バングにも子供が生まれ、ベンガル地方を繁栄させた。長子プールバは42人の息子を設けた。その筆頭がクリシュナ (Kīśana) である [図1]<sup>43</sup>。

さてプールバ (Pūrab) は元来「東国」を意味し、おおむねガンジス川中下流域を指す。バング (Bang) はベンガルに通じる。ナフルワール (Nahrwāl) はグジャラート地方の古都の名であるが、同地方全体を指すものであろう。マラータ (Marhat) がデカンの一民族の名であることは無論である。カナラはカルナータカ地方の言語名カンナダに通じるが、ここでは民族ないし地方の名を指しているだろう。ティリングは今日のアーンドラ地方の別名である。マールラージュは同定できないが、カンバージュはおそらくカンバーヤと直せるはずであり、これはバルーチュとともにグジャラート地方の著名な港町の名である。要するに、ヒンドの子孫たちの名はインドの地名や民族名であり、その広がりにはインドの東方、西方、南方をくまなくカバーしている。つまりこの所伝は、インド全土の住民がハムの子孫であることを説明しているわけであり、旧約的民族史をインドにまで拡張させたヴァージョンだと見なせよう。

インド人の祖先として、ハムの子孫の中にヒンドを挙げる説自体は、早くも10世紀前半のタバリーの歴史書に見える。しかしタバリーは例によって相矛盾する複数の情報を伝えており、ヒンドは結局ハムの子であるとも孫であるとも付かない結果を呈している。同じく10世紀のマスウーディーはハムとヒンドとの間の世代数を特定していないし、<sup>44</sup> 13世紀のイブン・アル＝アスィールに至っては、ヒンドはセムの子孫だという説を引いてさえいる。<sup>45</sup> このようにハムとヒンドとの関係についての諸史料の記述は長らく安定しない。ティムール朝時代の普遍史RSに至ってようやく、ヒンドはハムの息子ということに落ち着き、

43 GI: i, 15-16.

44 TRM: i, 212, 216-17.

45 MDh: ii, 276-77.

46 KT: i, 80-81.

16世紀の普遍史 HS もそれを踏襲する。しかしそのいずれにおいても、ハムは9人兄弟の一人だったことになっており、ヒンドの子孫たちについての言及は全く現れない<sup>47</sup>。要するに、先行するイスラーム世界の古典籍にインド人ハム子孫説は存在していたが、それを上記のような形に整理し、かつインド諸地方の諸民族に至る系譜まで付け加えたのは、インドの史料群の独創であったと判断できる。

(b) クリシュナ王～北インド諸王家

これはクリシュナ王に後続する歴代の王たちの事績である。すなわちクリシュナ王の王統が第四代フィールーズ・ラーイで絶えた後、15の王統、20人の王が相次いで登場した。最後の王はマーラデーヴァ王であり、彼の後には各地方に君主が並び立ち、ガズナ朝マフムードがインドに聖戦を敢行したときまで、インドに偉大な王は出なかった、とされる<sup>48</sup>。

この事項が備えている最も重要な役割は、ハムに始まるインド人の旧約的民族史の続編としての働きである。この事項があることによって、旧約的民族史がムスリム政権時代以降の歴史に接続され、始原から同時代にいたるインド史の通史的叙述が成り立つからである。

これら一連の所伝の史実性は問題とするに値しない。ただし各々の王のエピソードが、古代イランの伝説上の帝王たちとの関係を絡めて記述されている点には注意すべきである。例えば、第四代フィールーズ・ラーイはアフラーシヤーブと友好関係を結んでいたが、その後ロスタムの侵攻を被り、フィールーズの死後、彼の息子ではなく別の家系が王位を襲ったが、これはロスタムの主導によるものだった、といった具合である<sup>49</sup>。このような古代イラン史への付会を、イラン的伝統に対する特別の意識の反映と理解することは性急にすぎるだろう。むしろ各王の事績がしばしば「彼は……の同時代人である」との文言（……

47 RS: 25; HS: i, 32.

48 GI: i, 16-27.

49 GI: i, 18-19.

にはイランの帝王の名が入る)によって結ばれることを考えると、インド・イスラーム前史の事柄にクロノロジーを与えるという歴史家たちの技術的要求をまずは見いだすべきだと考えられる。イラン古代史は、インド・イスラーム社会の歴史家たちが利用し得た、イスラーム以前の時代に関する数少ない歴史叙述のひとつである。隣国イランの古代史は、インド・イスラーム前史に相対年代を与える参照系として利用されたものと考えられる。

### 5) インド地誌のイスラーム前史

この要素はAAに初出する。そこではムガル帝国15州それぞれの地誌の末尾に付された簡潔な歴史概説の一部を成している。AAの地誌のうち、イスラーム前史の要素を備えているのは、以下の5つの州にすぎない<sup>50</sup>。しかし、もしイスラーム前史の要素が15のうちの大半の州の歴史概説に含まれるべく、その後の史学史の中で充実していけば、全体として総合的なインド・イスラーム前史が出来上がるはずであるから、その展開には注意すべきである。

(a) デリー<sup>51</sup>: 『マハーバータ』の18日戦争について簡単な記述から始まる。この部分は上記要素2)事項(b)を圧縮したもので、その内容はこれにはほぼ並行している。一方、それに後続する記述は王名と在位期間のみを羅列するものであり、トーマラ (Tūnwara) 朝 (20代437年1ヶ月28日)、そしてチャウハーン朝 (Čawhān) 朝 (7代95年7ヶ月) を羅列した後、ゴール朝ムイツズ・アッディーン、クトゥブ・アッディーン・アイベグを経て、デリースルターン朝君主の列挙が続く。チャウハーン朝最後の君主として挙げられるのは、ピタウラー (Pithawrā) である。イスラーム前史をゴール朝の侵攻の記事によって閉じる点で、この叙述は上記の要素2)事項(c)と共通するが、ピタウラーに至る歴代の王の顔ぶれを全く異にしている別系統の所伝である。なおこの事

<sup>50</sup> スインド地方の地誌にも12世紀末以前の歴史概説が含まれているが、その記事はウマイヤ朝時代の遠征から説き起こされる (AA: i, 559-61)。インド・イスラーム前史の基準からはとらえにくい特殊な事例であるので、検討の対象から外した。

<sup>51</sup> AA: i, 515-17.

項も、『マハーバーラタ』の時代史とムスリム政権時代の歴史とを接続させる役割を果たしている点で、通史的叙述を導く重要なものである。

(b) ベンガル：<sup>52</sup>この地方がゴール朝の将軍ファフル・アッディーンによって征服されるまでの5つの王統、61代4544年、それ以降のムスリム支配時代の50代357年にわたる歴代の王の名前と在位期間が列挙されるのみの叙述である。

(c) マールワ：<sup>53</sup>マールワ・ゴール朝が成立(1402年)するまでの6つの王統、総計63代2563年あまりと、それ以降のムスリム支配時代の11代142年あまりにわたる歴代の王の名前と在位期間が列挙される。この後にヴィクラマーディティヤ王(Bikramāgīt)やボージャ王(Bhūg)の短いエピソードとマールワ・ゴール朝に至る事情が簡潔に記される。伝説上のヴィクラマーディティヤ王が登場する説話集『獅子座三十二話』*Singhāsan Battīsī*がアクバル時代にペルシア語に翻訳されており、それがこの叙述の典拠になった可能性がある。<sup>54</sup>

(d) グジャラート：<sup>55</sup>アフマド・シャーヒー朝が成立(1403年)するまでの3つの王統、23代566年と、この地方がムガル帝国に併合される(1573年)までの14代160年あまりにわたる歴代の王の名前と在位期間が列挙される。その後「インド語の書物」にもとづいて、この地方における最初の王朝の創設とその都パタンの創建の事情などが簡潔に述べられる。

(e) カシュミール：<sup>56</sup>シャー・ミール朝が成立するまでの8つの王統、159代3820年あまりと、この地方がムガル帝国に併合される(1586年)までの32代

52 AA: i, 412-15.

53 AA: i, 467-73.

54 この説話集のペルシア語訳は複数知られており、そのうちアクバル時代に作成されたものは以下の2つである [Sachau & Ethé 1889: 815]。第一は歴史家バダーウニーが1574/5年に完成させ、1594/5年に改訂したものである (MT: ii, 67, 183-4, 377) が、その写本は未だ知られていない。第二は Āturbhūgdās が作成したもので、ボドリーアン図書館に写本が伝存している (Ms. Walker 118)。AAの著者が参照し得たものは、以上二つの翻訳のいずれかであろう。なお KhT は、*Gul-Afsān* というタイトルのペルシア語訳を参照しているが (KhT: 6)、これがいずれの翻訳にあたるのかは不明である。

55 AA: i, 500-05.

56 AA: i, 574-85.

282年あまりにわたる歴代の王の名前と在位期間が列挙される。ここに引かれる王統の記述はカルハナ、ジョーナラージャ、シュリーヴァラによる一連の『ラージャタランギー』の所伝に一致する。<sup>57</sup>

## 6) インド来訪者列伝<sup>58</sup>

この要素は、外国からインドにやって来た人物44名の簡略な列伝で構成され、AAに見える。セイロン島に降り立ったとされるアダムに始まり、ノアの息子ハム、さらにフーシャング、ジャムシード、バフマンなど古代イランの伝説的な帝王の他に、アレクサンドロスも登場する。また絵師マニヤ、『パンチャタントラ』のパフラヴィー語訳を帰せられるブルズーヤといった文化史上の人物も言及される。これらに後続してムスリムがほぼ時系列順に立伝される。すなわちウマイヤ朝のスインド地方遠征を指揮したムハンマド・イブン・カーシム、セビュクテギンからスルターン・マフムードを経てホスロー・シャーに至る一連のガズナ朝君主、ゴール朝のムイッズ・アッディーンとその麾下にあってインド遠征軍を指揮したクトゥブ・アッディーン・アイバグ、ナーシル・アッディーン・クパーチャ。デリー・スルターン朝の君主はシャムス・アッディーン・イルトゥトミシュ、ギヤース・アッディーン・バラバンが挙げられる。これに続いて、チンギズ・ハーンの攻勢を受けて一時インドに亡命したホラズム・シャー、ジャラルール・アッディーン、さらにデリー・スルターン朝時代に侵攻したモンゴル軍の将軍たちの伝が続き、モンゴル時代の人々の列挙はイル・ハン朝時代の歴史家ラシード・アッディーンの伝で閉じる。<sup>59</sup>このように、立伝された人物はインドの外に生まれ、各々の人生のある時点でインドに来訪した（と著者が考えた）者が念入りに選ばれている。

57 『ラージャタランギー』の所伝が、アクバル時代に作成されたペルシア語訳を通じて、他の歴史書に継承されたことについては [小倉 2010: 41-42]。

58 AA: ii, 193-207.

59 ラシード・アッディーンが使者としてデリー・スルターン朝に派遣されたという情報はAAのこの箇所のみが伝えるが、これが史実として受け入れがたいことについては [Jackson 1999: 225 n. 57]。

ただし、アクバル時代の欽定史の一部をなす AA に記載されたこの列伝の眞の焦点は、おそらく最後の 3 人、すなわちムガル帝国王家の始祖にしてインド遠征を敢行したティムール、ムガル帝国政権の創設者バーブルとその子フマーユーンに向けられているはずである。そして一連のインド来訪者の後に位置する人物が、フマーユーンの後継者にして当代の帝王アクバルであることは AA の読者には自明の事柄であっただろう。アクバルがインド来訪者の列に加わらないことは、インドに生まれ生涯外地に出ることの無かった彼の史実を反映するばかりでなく、歴代の偉人に比しても際だつ帝王の特質を演出するものでもあったはずである。

#### 7) カマーラシュリーの所伝

この要素は、調査対象の文献群のうち、TH に大略次のような内容を備えて初出する。まず 4 つのユガが説明された上で、写本のわずか一葉あまりの紙幅に各々のユガの歴史が簡略に語られる。そしてカリ・ユガの叙述がシャカムニ (Śakamūni) の登場をもって閉じられ、この後にシャカムニ伝が続く。<sup>60</sup> この叙述は、同書が幾度も言及していることから裏付けられるとおり、JT の「インド史」に収録された、カシュミールの仏僧カマーラシュリーによる所伝<sup>61</sup>を大幅に節略したものである。

#### 8) クリシュナ・ヴァースデーヴァとその後

この要素が、既述の要素 3) 事項 (c) のエピソードと異なるのは、アヴァターラの枠物語からは独立した単体の物語である点、そしてクリシュナ・ヴァースデーヴァ以後の王についての叙述をも含む点である。その叙述の内容は概ね次の通りである。クリシュナ・ヴァースデーヴァの死後、アルジュナが後を継いだ。彼の後は ĞH SR、<sup>62</sup> KNKĀND と続いた。KNKĀND とカナウジの王との

<sup>60</sup> TH: 682r-683r.

<sup>61</sup> JT: 4, 75-128.

間には確執があった。KNKĀND の後は、SAMND, KLMW, Bhīma, Āy-pāl, Nand-pāl と続き、その次の BNDWĀ-pāl はヒジュラ暦412年 (1021/2年)、ムスリム軍によって殺害され、その息子 Bhīm-pāl が9 (ママ) 年間統治したが、彼がヒンドゥーの最後の王となった。彼の領域の大半をガズナ朝のスルターン・マフムードが占領した。<sup>63</sup>

以上の所伝は、いくつかの細かい差異を別とすれば、いずれも JT の「インド史」に収録された記事に依拠するものであり、これがさらにピールーニーの所謂『インド誌』の所伝に遡源することは明らかである。<sup>64</sup> たしかにヒジュラ暦412年にガズナ朝軍団の攻勢を受けて殺害されたのが、ヒンドゥー・シャーヒー朝アーナンド・パールの子トリローチャン・パールであったことは確定された史実である。<sup>65</sup> しかし JT もこれに拠ったインドの歴史書も、ピールーニーがもともと別個に記していたアルジュナまでの記事とそれ以後の記事とを合併・短絡させるという錯誤を犯している。このため上記の通り、神話時代の後わずか8代でヒジュラ暦412年に達するという、著しい不合理を生じさせているのである。

### 3. インド・イスラーム前史の諸要素の展開

#### 1) 全体的観察

第1章で選び出した文献群64点において、第2章で抽出したインド・イスラーム前史の諸要素がどのように含まれているのかを、文献の成立年代順に配列し

62 おそらく「ユディシュトラ」Ādiśtra の誤記であろう。

63 TH, f. 683v.

64 JT: 53 ff. テヘラン版とその底本 Topkapı Sarayı 1654 写本は KNKĀND の記事から先を欠くので、Royal Asiatic Society A. 27 写本とアラビア語版の写本 (Add. 7628, British Library) によって補った ([Jahn 1965] 所収の写真版による)。Jahn の独語訳はこの欠落部分を A. 27 写本に拠るが、歴代の王名の一部を訳し落としている (JT G tr: 45-46)。ピールーニー『インド誌』の対応箇所は [KTH: 200-02, 207-08]。

65 [Abdur Rehman 1988: 166].

て〔表3〕に示す。

「○」は当該列の要素が当該行の文献に含まれている場合に付した。これに含まれるケースは次の2つ。すなわちその文献が、初出の文献におけるその要素と同一の内容を備えている場合と、その要素の基本的な筋立てを保ちながら内容を縮約している場合である。後者は例えば、要素4)ハム子孫説の後半の事項(b)クリシュナ王以降のインド諸王家について、初出のGI (no. 19)において詳細に述べられている各王の事績が、*Ṣubḥ-i Ṣādiq* (no. 26)において、王の名前は省かれずに基本的な筋立てが維持されているものの、事績の叙述は大幅に刈り込まれて、全体の分量が圧縮されている、というようなものである。

つまり、同一列における複数の「○」は、年代の古い文献に対する新しい文献の依存関係ではなく、同類関係を示していることになる。このような類型化の方法を取るのには、インド・イスラーム前史の諸要素の展開を考察するという本論の目的に照らすと、各々の物語のテキストそのものの継承よりも、内容の継承こそが着眼点となるからである。何より、インド・イスラーム社会の古典籍が必ずしも自らの典拠を明示しない（明示があるにもかかわらず、対応関係が不明瞭な場合さえある）という実情を考えると、64点にもものぼる文献の依存関係を導くことは不可能に近い。

一方「○+」はその要素に新たな叙述が付け加えられたり、別の筋立てに改訂されたりしていることを意味する。例えば、要素4)ハム子孫説の事項(a)において、ヒンドの息子アカンの子3名についてはマラータとその兄弟の名前を列挙して終わるのが通例であるところ、*Aḥbār-i Maḥabbat* (no. 55)の場合、マラータの子孫に関する記述を付け加え、マラータ王家ボーンスレー家のシヴァージーが登場するまでの歴史をたどっている (*Aḥbār-i Maḥabbat*, 27r-28r)。

このような「○+」の例がきわめて数少ないことは、〔表3〕から明白である。つまりインド・イスラーム前史を構成する諸要素の基本的な筋立ては、著者の立場や著作の環境の如何にかかわらず、変化をほとんど被ることなく継承

されたことになる。通史的叙述のうちの古代史を構成する要素がもつこのような保守性は、イランの普遍史について守川氏が見いだした特徴と並行するであろう。<sup>66</sup> そうであればなおさら、それまでに無かったインド・イスラーム前史の要素が、歴史叙述の中に導入されたことの新規性は重要視されるべきである。

なお「○※」は、第2章で示した各要素とはことなる筋立てを備えた所伝であり、かつ他に類例のない孤立した所伝であることを示している。各々が興味深い異説を伝えているが、本論では追究しないことにする。

さて「●」は当該行の文献が「○」を1つ以上備えていることを示す。64点のうち「●」が付くものは25点にのぼる。この微妙な数値は、インド・イスラーム前史がインドの通史的叙述にとって必ずしも不可欠の要素ではなかったことを意味すると同時に、それが一部の史家や史書のみによって担われた特殊な要素ではなかったことをも示している、と見るべきである。また「●」は16世紀末に現れた後、それ以降の時代を通じてほぼ偏りなく分布している。この事実は、インド・イスラーム前史の要素が特定の時期にのみ流行した一過性の現象ではなかったことを示している。さらに「●」は、第1章において調査対象と定めた4つの類型のうち、デリー地方史、インド総合史、普遍史のいずれにも確認できる。このことは、インド・イスラーム前史の有無が類型の別によって左右される事柄ではなかったことを意味している。唯一、世界年代記の類型のみはこの要素をいずれの著作も備えていない。このことは、絶対年代をほとんど持たないインド・イスラーム前史の諸要素をこの類型の歴史書が取り込むことが、技術的にほとんど不可能であったことの反映であろう。

## 2) 継承されなかった諸要素

まず8つの要素に付けられた「○」の数を見ると、まず5)から8)までの諸要素が、その後の歴史書にさほど継承されなかったことは明白である。

要素5)事項(a)デリー地誌は、前述のとおり、『マハーバーラタ』の時代か

<sup>66</sup> [守川 2010: 13].

らムスリム政権時代までを接続させる重要な内容を備えている。にもかかわらず、要素5), 6)ともに、地誌の叙述の一部としてこの事項を転用している *Tuḥfat al-Hind* (no. 39)の他は、この事項を異説として紹介する KhT (no. 35), *Āhār Gulšan* (no. 50) があるに過ぎない(論理的に矛盾する内容を備えた要素2)事項(c)と要素5)事項(a)の両方に「○」があるのはこのためである)。また[表3]のデータは、AAが当初備えていたもの以上に、その地誌のヴァリエーションが広がることがなかったことを示している。もしインド各地方の地誌の一部として、各地方についてイスラーム前史が整備されれば、全体として総合的なインド・イスラーム前史が生まれたはずであるが、実際にはそのような展開は生じなかったわけである。

また要素7), 8)はいずれも、わずか2点の文献に現れるにすぎない。JTがインドの史学界においてよく知られた歴史書であったにもかかわらず、その「インド史」は、インド・イスラーム前史を取り扱う史家たちにほとんど受け入れられなかった、という興味深い事実をこのデータは浮き彫りにしてくれる。その理由として、要素7)については、これがその後の歴史に接続しない、閉じた物語であったために、歴史学の資料として活用されにくかった可能性が考えられる。一方、要素8)はその後の歴史に接続する構造を持っているにもかかわらず、著しく不人気であったことになる。これについては、前章の当該箇所指摘したとおり、ピールーニーの原典において別物であった2つの所伝を合併・短絡させたJTの叙述の瑕疵が、このような淘汰の理由になったと考えべきである。

### 3) 主要な諸要素の出現とその背景

[表3]では各要素各事項の初出より上に網掛けを施してある。それによ

67 バダーウニーはこの歴史書の梗概の作成をアクバルから命じられている(MT: ii, 384)。アクバル宮廷で製作されたJTの細密画付き写本(在テヘラン)については[Marek & Knížková: 1963]。

て、網掛けを免れた区域の上限が、いくつかの例外を除いて、16世紀末から17世紀初頭の時期に位置していることがはっきりする。つまりほとんどの要素はこの時期に新たに現れ、かつ出尽くしたということである。

さらにこれらの要素の出現がいずれの歴史書によって担われたのかを確認すると、*Maḡāmi' al-Aḡbār* (no. 10) のわずかなヴァリエーションを度外視し、要素7)、要素8)という不人気な要素を持ち込んだTH (no. 23)を排除してよいならば、AA (no. 13), RT (no. 18), GI (no. 19)という3点の文献によってほぼすべての要素がカバーされていたことが分かる。

後の時代になって新たに加わる要素としては、わずかに要素2)事項(a)と、要素2)事項(c)の2つがいずれも17世紀後半に登場したのみである。ただしこれら2つの事項の内容はいずれも、既存の文献によって作られていた『マハーバーラタ』という大きな枠組に依存するものである。それゆえ両者の存在は16世紀末から17世紀初頭という時期に生じた新機軸の意義を減じるものではない。

このような新機軸が他ならぬこの時期に登場した理由は、この3点の著作に共通している要素2)事項(b)バラタ族の18日戦争が、ある共通の情報源に由来していることによって説明できる。その情報源とはアクバル時代に作成された『マハーバーラタ』ペルシア語訳に歴史家アブル・ファズルが付け加えた序文である。<sup>68</sup>

この序文は、帝王アクバルへの賛辞から説き起こし、翻訳が作成されるに至った経緯を述べる。そのうえで4つのユガ、5元素説、ブラフマーについて説明し、バラタ族の18日戦争の一部始終を概述したあと、『マハーバーラタ』各章(parba)の内容紹介と詩節(aślūk)の数を記して終わる。<sup>69</sup>

この序文が、アブル・ファズル本人の著作AAに現れる『マハーバーラタ』のプロットの源であることは論を俟たない。<sup>70</sup>またGIは、多少の文言の出入りを別とすれば、ほぼそのままその序文を転用している。<sup>71</sup>一方RTについては、

<sup>68</sup> このペルシア語訳とアブル・ファズルの序文については [Rizvi 1952], [榊 2001]。

<sup>69</sup> MBh: i, i-xli.

10のアヴァターラの要素が『マハーバーラタ』の物語の前に挿入された部分や、多少の節略（これによって5元素説の事項は消失している）が施された部分を除けば、その叙述がこの序文を下敷きにしていることは明白である。<sup>72</sup>

『マハーバーラタ』のみならず、アクバル時代におけるインド古典のペルシア語訳事業は、要素3)事項(b)の典拠となった可能性のある『ラーマヤナ』、要素6)事項(c)の典拠となった可能性のある『獅子座三十二話』などの所産を生み出している。以上のことから、16世紀末～17世紀初頭にこそインド・イスラーム前史の様々な要素が出そろったことの主たる要因は、アクバル時代の翻訳事業に求められる。

ただしアクバル時代における一連の翻訳事業と史書編纂事業とを直接結び付けるアーンスト氏の説には同意できない。<sup>73</sup> 筆者もその因果関係は認めるが、それらの翻訳は元来、歴史叙述の資料たることを目的に作成されたわけではないと考えるからである。たしかに『マハーバーラタ』序文でアブル・ファズルは、翻訳作成の意義として「過去の事どもから教訓を得て、現在の時を授かり物と心得て、大切な時間を神意に適うべく使う」ため、史書の効用を挙げてはいる。<sup>74</sup> しかしこの序文を執筆した1587/8年当時、<sup>75</sup> アブル・ファズルはむしろ、帝王アクバルが「ムハンマド教の諸分派やユダヤ教徒やヒンドゥー教徒の対立を重大視し、相互の非難が度を越していることを認識したため」<sup>76</sup> 「諸宗派の大切な書物の数々が様々な言語に翻訳され」ることにより、彼らが「激しい非難・敵対から離れて、真理の探究者になるように」と、翻訳事業を構想していたこと

70 アブル・ファズルは デリー地誌の歴史概説の一部として、この序文をかなり縮約して転用している (AA: i, 515-17)。なおこの転用については [榊 2001: 46, n. 18]。

71 GI: i, 6-14。ただしGIの著者は、『マハーバーラタ』ペルシア語訳の序文のみならず、翻訳全体がアブル・ファズルによるものと誤解している (GI: i, 6)。

72 RT: 467v-469r.

73 [Ernst 2003: 179-83].

74 MBh: xix.

75 MBh: xvi.

76 MBh: xviii. 'farāyiq-i millat-i muḥammadī wa ḡuhūd wa hunūd'. [Ernst 2003: 180, 182, n.27] は 'ḡuhūd wa hunūd' を 'ḡuhūd-i hunūd' と読み替えているが、無理だろう。

を強調しているのである。<sup>77</sup>ここに宗派对立の克服や宗派間の宥和という脱歴史的な問題意識を読み取るべきかどうかはともかく、すくなくとも翻訳の目的が歴史叙述に結び付けられてはいないことを確認すべきである。また翻訳された一連の古典籍に、歴史叙述の素材となり得る物語や叙事詩ばかりでなく、『アタルヴァヴェーダ』のような宗教書、『リーラーヴァティー』のような数学書が含まれていることも、この判断を支える材料である。<sup>78</sup>

翻訳事業と史書編纂とを別に考えるべきもう一つの理由は、各々のクロノロジーである。アクバル時代に翻訳されたインド古典は、その帰属に議論の余地があるものも含めると、今のところ15点が知られている。このうち『マハーバーラタ』に依存する『ハリヴァンシャ』『ナルとタマン』<sup>79</sup>『バガヴァッド・ギーター』と、『ラーマーヤナ』に取材する『ヨーガヴァーシシュタ』を除外し、著作の同定や作成年代が不明なものを除くと、翻訳の多くは1570年代から80年代にかけて行われている。とくに上記の議論で言及された『獅子座三十二話』『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』はいずれも1570年代半ばから80年代半ばまでに着手されているのである。<sup>80</sup>これに対してインド・イスラーム前史を包摂しうる総合的な史書がアクバル宮廷で編纂されるのが1590年代に入ってからであることは[表3]によって明瞭である。

以上の根拠から、アクバル時代におけるインド古典のペルシア語訳事業と一連の史書編纂とは、別個の事柄であったと考えるべきである。そうであるとすると、翻訳の所産を歴史叙述の資料に転用した上記3点の歴史書の判断こそが、新しいものであったことになる。そしてその中でも、最も鮮やかなかたちでの革新を担ったのは、次節に見る GI であった。この歴史書がデカン地方アー

<sup>77</sup> MBh, xviii-xix.

<sup>78</sup> AA: i, 115.

<sup>79</sup> このペルシア語作品については [Alam & Subrahmanyam 2006]。

<sup>80</sup> アクバル時代の翻訳活動については [Rizvi 1975: 203-20]。これ以降の研究としては [Athar Ali 1999] が部分的に新たな知見を加えている。またペルシア語に翻訳されたサンスクリット語の古典籍については、[Sharma 1982] が不十分な箇所があるものの、一応網羅している。

ディル・シャーヒー朝のもとで成立した事実は、その歴史叙述の革新が、アクバル宮廷における史書編纂や、それが表象していたムガル帝国の政治的威信の外で生じたことをはっきりと示している。

#### 4) GIの意義：インド史の成立

さて以上のように、AA, RT, GIの意義を確認した上で、その後の歴史叙述に頻繁に受け継がれた要素1)、要素2)事項b)、要素4)の展開を[表3]によって確認すると、要素4)をはじめて備えたGIの新規性が浮かび上がる。

要素4)の重要な働きは、ムスリム以降の時代史に接続するインド・イスラーム前史を提供している点である。そのことの意味は、AAのような断片的な地方史の集合とも、RTのようなムスリム時代史に接続しない閉じた物語とも異なる。GIはこの要素4)によって、古代史から当代史に連続する筋道を備えたインド史としての体裁を獲得したことになるのである。

ところでGIが、要素1)、2)を包摂する『マハーバーラタ』序文を転用する点はAA, RTと同じであるが、GIの筋立てにおいて特徴的なのは、これを謬説として退け、真正説としての要素4)インド人ハム子孫説に説き及ぶという論理構造である。その際、異説に対する反駁の前置きとしてGIが引き合いに出すのは「バラモンたちの信条」の数々であり、中でも重要なのは「チーナ、ヒタイ、ホタンの異教徒たちと同様、インドの異教徒たちも、ノアの洪水は自分たちの国に及ばなかったと言っている。というより、彼らはノアの洪水そのものを信じていないのだ<sup>81)</sup>」という議論である。というのも、旧約的な世界観の大前提が引き合いに出されることによって、『マハーバーラタ』を借用して行われたインド的歴史観と、その後に記述される旧約的歴史観とが、鮮やかに対比されるからである。それゆえGIのみならず、要素2)事項(b)バラタ族の18日戦争と要素4)インド人ハム子孫説とを兼備した他の文献においてもしばしば、この洪水否認説は出現するのである (nos. 31, 57, 62, 64)。

<sup>81)</sup> GI: i, 14.

## 5) インド人ハム子孫説と旧約的民族史

要素4)インド人ハム子孫説が、さらに別の意味を帯びていた可能性を指摘したい。

### (a) トルコ人やペテ子孫説

インド・イスラーム社会の歴史書には、ハム子孫説の他にも、旧約聖書上の人物に系譜を遡源させる民族史が含まれている。GIが執筆された17世紀初頭、北インドの覇者ムガル帝国の王室は、ノアの子ヤベテに至る系譜を主張していた [図2]。トルコ・モンゴル諸族をヤベテに遡源させる旧約的民族史の枠組みと、これにティムール朝王家の系譜を接続させる筋立ては、ティムール朝時代の歴史書によってすでに整理されていた<sup>82</sup>。つまりティムール朝の後継王朝であるムガル帝国の系譜は、ティムール以降の自らの王統をこれに後続させてできあがっているわけである<sup>83</sup>。

ムガル帝国において編纂された公式の歴史書の中で、上記のようなかたちで王室のヤベテ系譜説を最初に明記した文献は1602年まで書き継がれたANだった。1606/7年にデカンで成立したGIの著者がANを参照したか否かを確認する材料はない<sup>84</sup>。しかし、当代君主からティムールまで遡源する系譜を備えた玉

[図2] AN: i, pp. 48-49, 52-86 による。

ノア — ヤベテ — トウルク — 【中略】  
— アランコア — 【中略】  
— トゥメネ・ハーン — カチュリ・ハーン — 【中略】  
— ティムール — ミーラーン・シャー — 【中略】  
— ウマル・シャイフ・ミールザー — バーブル — フマーユーン  
— アクバル

<sup>82</sup> ZN: 12a-25a, 26a-27a, 78a, 82b-83a; RS, 817-22, 1011; HS, iii, 5-16, 392-93.

<sup>83</sup> これについて詳しくは [真下 2000: 735-734]。

<sup>84</sup> GIの著者は自ら参照した書物を列挙しているが [GI: i, 6]、この中にANは含まれていない。しかし [Athar Ali 1995: 363] が正しく指摘するとおり、この一覧には不備があり、『マハーバーラタ』ペルシア語訳や後述する *Matla' al-Anwār* など、同書が依拠したことがはっきりしている書物が挙がっていない。

璽がアクバル時代に一般化していたことを考えると、ムガル帝国にとってのトルコ人ヤベテ系譜説は AN よりも相当早い時期に確立していたと見るべきである。北インドで書かれた歴史書を多数参照し、『マハーバーラタ』ペルシア語訳のようなムガル帝国の文化事業の成果を、早くもデカンで利用し得た GI の著者にとって、AN によらずとも、何らかの情報源によって帝国の系譜説を知ることは可能であったと推論できる。

一方 GI は、デカン地方のアーディル・シャーヒー朝のもとで執筆されている。この王朝の創始者が、北西イラン出身のトルコ人であったことは史実であり、GI は彼らの起源説話として、オスマン朝君主メフメト 2 世の弟の亡命に始まる一種の貴種流離譚を仕立て上げている。<sup>86</sup>これが GI の著作された 17 世紀以前にすでに成立していた言説であることは、同様の説話が 16 世紀半ばのポルトガル語史料に記録されていることによって明らかである。<sup>87</sup>GI が伝えるこの王家の系譜はその王弟より先には遡らないが、GI の著者にとって自らの主家の系譜がその先、トルコ人の始祖たるヤベテに遡ることは、あらためて語るまでもなく自明のことであったはずである。というのも RS や HS といった、トルコ人ヤベテ子孫説を確立させていた在来の普遍史を、GI の著者は参照しているからである。<sup>88</sup>

要するに GI の著者は、アーディル・シャーヒー朝やムガル帝国といったトルコ人支配者たちの系譜を、旧約的民族史のトルコ人ヤベテ子孫説に即して記述する歴史学の環境の中で著作をものしたことになる。そうであるならば、インド人の起源をヤベテとは別の名祖ハムに求める物語が編み出されたことの意味がはっきりしてくるだろう。13 世紀以降インドの政治史の舞台に新たに登場したトルコ人ムスリムたちと、その支配下に組み込まれたインド在来の住民との差異を、これら 2 つの民族史は鮮やかに描き分けることになるからである。

<sup>85</sup> [Gallop 1999: 107-111], [真下 2000: 736-735].

<sup>86</sup> GI, ii, 1-5.

<sup>87</sup> 詳しくは [Mashita 2003: 84, n. 59].

<sup>88</sup> GI: i, 6.



人人を「エジプト人」(Qibtī)とする所伝にも触れている。<sup>91</sup>この「エジプト人」の所伝はTKhJにおいてヤコブとサウルの間に置かれる物語にあたり、<sup>92</sup>GIにも短い記事が見られる。<sup>93</sup>要するにこのような小さな前例はたしかにあったものの、諸部族の系譜をTKhJほど包括的に記述したものはなかった。このような伝承の数々を総合し、アフガン人セム子孫説という旧約的民族史にまとめ上げたところにTKhJの意義を認めるべきである。

さて注意すべきは、このようなアフガン人の旧約的民族史が、17世紀初頭のムガル帝国の歴史叙述が作用する環境で整理されたことである。TKhJはムガル帝国の中で書かれたので、当然ANをはじめとする複数の歴史書に依拠している。<sup>94</sup>であるならばその著者は、ANにおいて確定されていたムガル帝国王室の系譜とそれにまつわるトルコ人やベテ子孫説についても了解していたであろう。一方TKhJはムガル帝国に服属するローディー族のアフガン人貴族のために書かれた歴史書としての側面も持っていた。16世紀中にムガル帝国で作成された歴史書群は、ローディー朝、スール朝、カララーニー朝といったアフガン人王朝とムガル帝国との闘争の歴史をしばしば、「ムガル」と「アフガン」との対決という図式に単純化して記述する。<sup>95</sup>この二元論的な歴史叙述を心得ていたはずのTKhJの著者がアフガン人の民族史を記述するときにもまた、ムガル帝国の系譜に対置される独自の系譜を必要としたことは想像に難くない。

以上のように、GIのインド人ハム子孫説は、TKhJのアフガン人セム子孫説とほぼ同時期に、ムガル帝国の歴史叙述が主張するトルコ人やベテ子孫説が意識される環境のなかで登場した。17世紀初頭に相次いで確立した、ノアの

<sup>91</sup> AA: i, 591.

<sup>92</sup> TKhJ: 29-35.

<sup>93</sup> GI: i, 28-29.

<sup>94</sup> TKhJ: 309, 312-13.

<sup>95</sup> LQ: 31; NM: 79v; TAc, 218; TSS, 54, 60-61, 87, 104, 125-26, 128, 141-2; TW, 28r, 118r (ed. 103, 188).

<sup>96</sup> GIとTKhJとの相互関係を確定する材料は今のところない。1613年にムガル帝国

3人の息子にそれぞれ遡源する3つの民族史は、各々を知る史家たちの目に、整然たる体系をそなえた旧約的歴史叙述と映ったはずである。

## 6) もう一つのインド史

[表3]は17世紀後半に、新たなインド・イスラーム前史の事項が加わったことを示している。すなわちRW (no. 33)に初出する要素2)事項(c)とKht (no. 35)に初出する要素2)事項(a)である。いずれも後続の歴史書にしばしば継承された事項であることは、両列の下に続く複数の「○」によって明白である。

このうち後者は、RTやGIによって持ち込まれていた要素2)事項(b)18日戦争の物語に前説を付け加えるに過ぎないので、ここで取り上げるに値する意義を持たない。これに対して前者はきわめて重要な新機軸をインド・イスラーム前史の歴史叙述の中に持ち込んでいる。それは、従来になかった新しい叙述によって、インド・イスラーム前史をムスリム政権時代に接続させ、古代から当代までの通史的叙述を成り立たせている点である。

RWの通史的叙述がGIのそれと異なるのは、インド史の展開を内在的に説明する点である。すなわちRWは、インド・イスラーム前史を『マハーバータ』の神話時代から説き起こし、要素2)事項(c)を介在させることによって、叙述の舞台をインドの外に動かすことなくムスリム政権時代に接続させているのである。これに対してGI以下の歴史書は前述の通り、『マハーバータ』の物語をインド人の謬説として退けた上で、ハムの子孫の移住という外的要因によってインド史を説き起こす。両者の間で、叙述の論理が完全に異なる

---

\\領デカンで完成したTKhJの著者が1606/7年にアーディル・シャーヒー朝デカンで完成していたGIを参照し得たかどうかは判断が難しい。ただしアフガン人セム子孫説については、両者に共通する情報源として *Matla' al-Anwār* が存在したことがはっきりしている。しかし残念ながらこの書物を特定することはできない。GIの著者はこの書物をハーンデーシュ地方の都市ブルハンプルで閲覧し、アフガン人の記事の典拠としたという (GI: i, 28)。一方TKhJもデカンのベラルール地方でこの書物を執筆する際に、この書物を閲覧したと伝えている (TKhJ: 6)。

ことは明らかであろう。

残念ながら RW が備えているこの特徴の由来や背景を説明する材料はない。著者バンワーリー・ダースについては、その名から知られるとおり彼が非ムスリムであったこと、ダーラー・シコーの書記として奉職していたこと、ダーラーの師ムッラー・シャーを通じてスーフイズムの教授を受けていたこと、ペルシア語作品の筆名として「ワリー」ないし「ワリー・ラーム」を名乗ったことが知られている。また彼の著作として RW の他に、マスナウィーと、サンスクリット語の劇作品のペルシア語訳 *Gulzār-i Hāl* などがあることが知られているし、アーンスト氏は『ヨーガヴァーシシュタ』ペルシア語訳の改訳に彼が関与した可能性も示唆している<sup>97</sup>。しかし RW の著作に関連する情報は管見の限り、次の一つのみである。すなわち RW を典拠の一つとして挙げる KhT が「ミスラ・ヴィドヤーダラ (Miṣra Bidyādhara) がラージャたちの名前をインド語の文字で記し、それをゴサーイン・ワリー・ラームの弟子たちの精髓たるサーフー・ラームがペルシア語に翻訳した」と伝えている<sup>98</sup>。仮にこれを信じるなら、ワリー・ラームことバンワーリー・ダースはペルシア語訳の監修者ということになるが、現時点ではこれ以上の判断を導く材料がない。またミスラ・ヴィドヤーダラという人物についても、「インド語」の原著についても、不明の点が残るばかりである。

由来や背景は別としても、RW のインド・イスラーム前史が独自の論理に貫かれていることを、後続の歴史家たちがはっきりと理解していたことは、次の観察によって確実である。[表 3] において要素 2) 事項(c)を備えた文献は RW の後に 6 点あらわれる (nos. 35, 48, 50, 55, 59, 61)。これらのうち、やや個性的な特徴を備えている *Aḥbār-i Maḥabbat* (no. 55)<sup>99</sup> を除く 5 点がイン

<sup>97</sup> バンワーリー・ダースに関しては [Ernst 2003: 184], [Storey 1927-39: 450-51]。

<sup>98</sup> KhT: 7。

<sup>99</sup> この歴史書は要素 2) 事項(c)のマハーバーラタ統編を踏襲しつつ、ピクラーマージート王の箇所 *Singhāsan Battisi* に依拠する記事を補ったり (*Aḥbār-i Maḥabbat*, ff. 42v-44r)、RW には無いガズナ朝の記事を叙述の途中に挿入したりしている (do., ff. 44v-52v)。

ド人ハム子孫説を備えていないことは [表3] の「○」の分布によって分かる。インド人ハム子孫説がこれらの歴史書が著作された時期に並行する別の歴史書に現れていることを考え合わせると、これらの著者たちがインド人ハム子孫説を知らなかったとは考えにくい。つまり彼らは、要素2)事項(c)のマハーバーラタ統編と要素4)のインド人ハム子孫説とが論理的に相反する筋立てであることを理解し、意識的に前者を選びとり後者を排除したと見るべきである。

著者たちのそのような歴史認識の背景を特定することは、今のところ難しい。上記の6点の著者のうち、*Tārīḥ-i Hindī* の著者を除く4名までが非ムスリムであることは、そのような背景の一端を説明してくれるかも知れない。しかし *Tuḥfat al-Hind* (no. 39), *Tārīḥ-i Muḥammad Šāhī* (no. 46) の例はその反証となるだろう。その著者両名は非ムスリムであるが、両書のインド・イスラーム前史を構成しているのは、要素2)事項(c)マハーバーラタ統編ではなく、要素4)インド人ハム子孫説である。それゆえ歴史認識の傾向と宗派性とを結び付ける根拠はなお薄弱である。また各々が作成された環境も次の通り多岐にわたっているので、一定の傾向を見いだすことは難しい。KhTの著者はラホール州の町バターラの生まれで、「国務・財務の役人方」に書記 (*ḥuṭūṭ nawīs; munšī*) として奉職していた人物である。<sup>100</sup> *Tārīḥ-i Hindī* の著者はボーパールのナワーブ、ヤール・ムハンマド・ハーンの保護のもとで本書を完成させている。<sup>101</sup> *Čahār Gulšan* はムガル帝国の実力者ガーズイー・アッディーン・ハーンの求めに応じて書かれた。<sup>102</sup> *Čahār Gulzār-i Šuġā'ī* はアワドのナワーブ、シュジャー・アツダウラに献呈されている。<sup>103</sup> 以上3名の保護者・被献呈者がムスリムであることは、この要素に宗派的意味を見いだそうとする判断の反証たり得よう。*Rāġ Sohāwalī* について分かることはほとんど無く、著者がア

<sup>100</sup> KhT, 6. [Sarkar 1901: xi-xiv]; [Alam & Subrahmanyam 2010: 398-404].

<sup>101</sup> [Rieu: iii, 909]; [Elliot & Dowson: viii, 40-41].

<sup>102</sup> [Rieu: iii, 910]; [Sarkar 1901: xv-xvi].

<sup>103</sup> [Rieu: iii, 912].

ワド地方ラクナウー県の出身だったことが知られているにすぎない。<sup>104</sup>

RW のもたらした内在的なインド通史がある程度普及したことには、もう一つ傍証がある。RW の叙述の終点は、前章で説明したとおり、ムガル帝国君主シャー・ジャハーンである。ところがこの著作のいくつかの写本はしばしば、その後の君主についての記述を追加する部分を伴う。しかも追加の叙述の終点は、バハードゥル・シャー 1 世（位1707-12）、<sup>105</sup>ムハンマド・シャー（位1719-48）、<sup>106</sup>アーラムギール 2 世（位1754-59）、<sup>107</sup>シャー・アーラム 2 世（位1759-1806）<sup>108</sup>と、様々である。以上のような複数の増補版の存在は、18世紀に入っ  
てなお RW の内容が一部の著述家たちの関心事であり続けたこと、すなわちこのインド・イスラーム前史が再生産され続けたことの証拠である。

## おわりに

18世紀末以降、ムガル帝国の解体にともなう政治情勢の変動は、インド・イスラーム社会の歴史叙述をとりまく環境にも、大きな変化をもたらした。英国東インド会社の活動に関連して、修史官が置かれたり、<sup>109</sup>フォート・ウィリアム・カレッジのような教育機関が設けられたりしたこと、<sup>110</sup>アラビア文字やインド系

<sup>104</sup> [Ethé: 88-89].

<sup>105</sup> [Pertsch: 51, no. 14(80)].

<sup>106</sup> [Rieu: iii, 916, Or. 1688]; [Blochet: i, 332, no .552]; [Sachau & Ethé: 96, no. 170].

<sup>107</sup> [Mehren: 18, no. 47].

<sup>108</sup> [Rieu: iii, 925, Or. 1764 I].

<sup>109</sup> この時代の修史官 R.Orme については [Delgoda 1992]。18世紀後半以降に書かれたペルシア語の歴史書の中に、英国人のために書かれたものがあることは、このような英国人によるインド史研究を反映している。本論で取り上げた歴史書の中では、*Tā rīh-i Mamālik-i Hind* (no. 57) や *Ḥaḡiqat-hā-yi Hindustān* (no. 60)、*Rāḡ Sohāwalī* (no. 61)、*Ṣaḥīḥ al-Aḡbār* (no. 63) がそれにあたる。

<sup>110</sup> 1800年カルカッタに開設されたフォート・ウィリアム・カレッジについては [Das 1978]。また1812年マドラスに開設されたカレッジ・オブ・フォート・セント・ジョージについては [Pernau 2006]、1825年に開設されたデリー・カレッジについては [Trautmann 2009]。

文字による印刷が本格的に始まったこと、<sup>111</sup>近代的な東洋学の研究機関が相次いで設立されたことなどがそれである。<sup>112</sup>

このような状況において歴史叙述に直接生じた変化は、新たな著述言語の登場である。ペルシア語による歴史叙述がただちに消滅したわけではないが、<sup>113</sup>ウルドゥー語やベンガル語をはじめとする近代インド諸語や英語による歴史叙述はこの時期に本格的に始まった。このうちウルドゥー語の歴史書については、初期の著作の多くが、英国によって開設された教育機関において、ウルドゥー語の読本ないしインド史の教本として編纂されたという [Khan 2005: *passim*]。それらの歴史書は、既存のペルシア語著作からの翻訳として成立したものも含まれている点では、従来の歴史叙述の伝統を継承している面もある。けれども著者（訳者）の同時代に連続しない、孤立した断代史が頻繁に著されるなど、従来の歴史叙述においては見られなかった現象も生じている。一連の変化は、著述言語の交替のみに留まらない、複雑な展開を呈したものと考えられる。19世紀に入ってもなお威信を維持していたペルシア語による歴史叙述との関係も含め、今後さらなる研究を要する問題である。

本論は、インド・イスラーム社会の歴史書群の中に、GIとRWによって導かれた2つのインド史を検出した。このうち前者が、上記のような18世紀末以降の変化の中でたどった展開に触れて、結語としたい。<sup>114</sup>注意すべきは、英語に

---

111 カルカッタで現れたアラビア文字の出版物で最も年代の早いものは、C. ウィルキンズが出版したペルシア語散文の範例集の英語対訳付属版 *The forms of Herkern*, Calcutta, 1781である [Shaw 1981: 79]。なお近代インドにおける出版の歴史については意欲的な成果が近年に現れており、印刷の普及が歴史叙述に及ぼした影響は今後徹底的に研究される必要がある [Шеглова 2001], [Gupta & Chakravorty 2004], [Ghosh 2006], [Ogborn 2007], [Stark 2007], [Green 2009]。

112 英国に関係する機関としては1784年設立の *The Asiatic Society of Bengal*、1819年設立の *Bombay Literary Society* (1828年に *Bombay Branch of the Royal Asiatic Society* に改組)、1823年設立の *The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* がある。

113 19世紀初頭においてもなお、ペルシア語が著述言語として優勢であったことについては [真下2009: 205]。

114 ベンガル語による歴史叙述のうち、1808年にカルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジの委嘱によって出版されたインド史 *Rājābalī* は、「中間層」知識人による／

よってインドの歴史が叙述される際、最もよく参照された典拠がGIであったことである。その最初の例は A. ダウ『ヒンドスタン史』(London, 1768)であり、その叙述の実体はGIのデリー章の英語訳であった [Dow]<sup>115</sup>。この後GIに直接、間接に拠った歴史叙述はいくつか現れるが、<sup>116</sup>ほぼ全訳といえる体をしたのは1829年に出版された J. ブリグズの英訳が最初である [Briggs]。この翻訳は、数多くの欠陥(かなり自由な翻訳、韻文の削除など)を含むにもかかわらず、ブリグズ自身が編集にあたったベルシア語刊本(Bombay & Poona, 1832)とともに、その後長らく英語によるインド史叙述の主要な資料として用いられることになる。<sup>117</sup>

しかしインドの通史としてのGIの特性は、英語のインド史叙述に継承されなかった。ダウ訳はインド・イスラーム前史について、創世とバラタ族の戦争の記事をカットしたばかりでなく、インド人ハム子孫説のうちクリシュナ王までの叙述をも削除している [Dow: i, 1-16]。またブリグズ訳はハムからクリシュナ王までの叙述をカットして、一連の叙述に断絶を生じさせている

インド史叙述の所産であり[中里 2009: 678-86]、18世紀から19世紀初頭までのベンガルで「バラモン文人や彼らを保護していた地主層の間にすでに普及していた叙述を筆録」したものであるという [P. Chatterjee 1994: 5]。この「プラーナの歴史書」[do.: 5]は、本論が扱ったイスラーム社会の歴史書群に並行する独自の歴史叙述として重要な意味を持つものと思われるが、[P. Chatterjee 1994], [中里2009] および [K. Chatterjee 2009: 131-149] が記述するその内容は、本論が紹介したRWのインド・イスラーム前史といくつかの特徴を共有しているように思われる。この点については、さらなる検討を要する。

<sup>115</sup> 初版を参照できなかったので以下の引用は第2版による。ダウの生涯と著作については [Grewal 1970: 6-22]。

<sup>116</sup> 英国東インド会社修史官オームはダウの英訳を自著の参考文献に挙げている。R.Orme, *Historical fragments of the Mogul Empire, of the Morattoes, and of the English concerns in Indostan from the year MDCLIX*, London, 1782. また総督ヘイスティングズのベルシア語秘書官であり、『アラビアン・ナイト』英訳の作者として知られるスコットによるデカン地方史の部分の抄訳版もある (J.Scott, *Ferishta's history of Dekkan, from the first Mahummedan conquests*, Shrewsbury, 1794)。さらに私人ジャンティルによって1772年に作成されたGIの要約が手写本として現存している (J.-P.-J. Gentil, *Abrégé historique des souverains de l'Indoustan*. Bibliothèque Nationale de France, Cat. no. 24219)。

<sup>117</sup> ブリグズの評伝としては、当人の死後ほどなくして編まれた [Bell 1885] の他、[Deshpande 1987] がある。

[Briggs: i, lxiv]<sup>118</sup>。つまりインド・イスラーム前史の核心的な要素を失ったGIのインド史は、もはや通史的叙述たり得ず、このようなギャップによって隔てられた2つの叙述に分解されたことになる。2つの英訳の主たる関心が、ギャップに後続するムスリム政権以降の歴史に向けられていたことは、[Briggs]の英語表題『1612年までのインドにおけるマホメット教徒権力の興隆史』が物語っている。

歴史叙述のこのような分解は、近代的なインド史叙述のさきがけの一つであるM. エルフィンストン『インド史』<sup>119</sup>が「ヒンドゥー時代」と「マホメット教徒時代」からなる2部構成とされていたこと、エリオットのペルシア語史料抄訳集『インドの歴史家たちによって記されたインド史』の副題が「ムハンマド教徒時代」とされていたことと並行する事柄である[Elliot & Dowson 1867-77]。英語のインド史叙述において、この2つの「時代」の後に配置されるのは「英領時代」でなければならなかった。このことは、1817年の初版以来いくども増補・改訂を重ねたJ.ミル『英領インド史』<sup>120</sup>や、エルフィンストンの遺稿を整理し『インド史』の続編として刊行された『東洋における英国勢力の興起』<sup>121</sup>の存在によって、十分に説明できる。<sup>122</sup>GIのインド・イスラーム前史はこうして、孤立した古代史のエピソードとして無意味化された。そしてGIのインド史は、英語によって記述される新たなインド史叙述の中で、ムスリム政権時代に関する資料のひとつという新たな意味を与えられたのである。

<sup>118</sup> GIを[Briggs]によって読んだアーンスト氏はこの削除を見落としたために、GIのインド・イスラーム前史の構成を誤解している[Ernst 2003: 183]。

<sup>119</sup> M. Elphinstone, *The history of India*, 2 vols., London, 1841.

<sup>120</sup> J. Mill, *The history of British India*, London, 1817.

<sup>121</sup> M. Elphinstone (ed. E. Colebrooke), *The rise of the British power in the East, being a continuation of his 'History of India in the Hindû and Mahometan periods'*, London, 1887.

<sup>122</sup> このような3つの時代区分に対する批判は[Mukhia 1998: 99-100]; [Eaton 2000: 246-47]。

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), 2 vols., Calcutta, 1867-77.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. M. A. A. 'Alī & M. 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-86.
- Briggs: J. Briggs, *History of the rise of the Mahomedan power in India, till the year A.D. 1612*, 4 vols., London, 1829.
- Dow: A. Dow, *The history of Hindostan from the earliest account of time, to the death of Akbar*, London, 1768. (2nd ed. London, 1770).
- GI: Muḥammad Qāsim Firištah, *Gulšan-i Ibrāhīmī*. J. Briggs & M. H. 'A. H. Muštāq (eds.), 2 vols., Bombay & Poona, 1831-32.
- Hay: J. Hay, *De Rebus Iaponicis, Indicis, et Peruanis Epistolae Recentiores*. Antwerp, 1605.
- HS: Ḥwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*. M. Dabīr Siyāqī (ed.), 4 vols., Tihirān, 1353 Š.
- JT: Rašīd al-Dīn, *Ġāmi' al-Tawārīḥ*. M. Rawšan (ed.), Tihirān, 2005; G tr.: K. Jahn, *Die Indiangeschichte des Rašīd ad-Dīn*, Wien, 1980.
- KhT: Suḡān Rāy Munšī, *Ḥulāṣat al-Tawārīḥ*. M. Z. Hasan (ed.), Delhi, 1918.
- KT: Ibn al-Aṭīr, *al-Kāmil fī al-Tawārīḥ*. C. J. Tornberg (ed.), 1851-76 (repr. Beirut, 1979).
- KTH: Bīrūnī, *Kitāb fī Taḥqīq mā li-al-Hind*. E. Sachau (ed.), London, 1887.
- LQ: Rukn al-Dīn Gangūhī, *Laṭā'if-i Quddūsī*. Delhi, 1311 A.H.
- MBh: *Mahābhārata*. M. R. Ġ. Nā'inī & N. S. Šūklā (eds.), 4 vols., Tihirān, 1358-59 Š.; 上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ』1-7, 筑摩書房 2002-3.
- MDh: Mas'ūdī, *Murūḡ al-Dahab*. C. Pellat (ed.), 5 vols., Beirut, 1966-79.
- Monserrate: A. Monserrate, *Mongolicae Legationis Commentarius*. H. Hosten (ed.), *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, 3(9), 1914; J tr.: モンセラテ (清水廣一郎・池上岑夫訳)『ムガル帝国誌』岩波書店 1984.
- MT: 'Abd al-Qādir Badā'unī, *Muntaḥab al-Tawārīḥ*. M. A. 'Alī & K. al-D. Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta, 1864-69.
- RS: Mīrḥwānd, *Rawḍat al-Šafā'*. 'A. Zaryāb (ed.), 2 vols., Tihirān, n.d.
- RT: Ṭāhīr Sabzawārī, *Rawḍat al-Ṭāhīrīn*. Ms. Or. 168, British Library.
- RW: Banwālī-Dās, *Rāḡāwalī*. Ms. Add. 25971 II, British Library.
- TA: Nīzām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & H. Ḥusayn (eds.), 3 vols., Calcutta, 1913-41.
- TAK: 'Arīf Qandahārī, *Tārīḥ-i Akbarī*. M. al-D. Nadwī, A. 'A. Dihlawī & I. 'A.

インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について

‘Arṣī (eds.), Rāmpūr, 1962.

TH: Ḥaydar Rāzi, *Tārīḥ-i Ḥaydarī*. Ms. orient. Fol. 17AB, Staatsbibliothek, Berlin.

TKhJ: Ni‘mat Allāh, *Tārīḥ-i Ḥān-i Ġahānī wa Maḥzan-i Afgānī*. M. Imām al-Dīn (ed.), 2 vols., Dacca, 1960-62.

TRM: al-Ṭabarī, *Ta’rīḥ al-Rusul wa al-Mulūk*. M. J. de Goeje (ed.), Leiden, 1879-1901.

TSS: ‘Abbās Ḥān Sarwānī, *Tārīḥ-i Šīr Šāhī*. M. Imām al-Dīn (ed.), Dacca, 1964.

TW: Ġawhar Āftābačī, *Tadkīrat al-Wāqī‘āt*. Ms. Add. 16711, British Library; Ed.: W. M. Thackston (ed.), Costa Mesa, 2009.

ZN: Šaraf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Ẓafar Nāmāh*. A. Urunbaev (ed.), Tashkent, 1972.

二次文献

Abdur Rehman 1998: *The last two dynasties of the Šāhis*, Delhi.

M. Alam & S. Subrahmanyam 2006: ‘Love, passion and reason in Faizi’s Nal-Daman’, F. Orsini (ed.), *Love in South Asia: A cultural history*, Cambridge, pp.109-141.

M. Alam & S. Subrahmanyam 2010: ‘Witnesses and agents of empire: Eighteenth-century historiography and the world of the Mughal munshi’, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 53-1/2, pp.393-423.

M. Athar Ali 1995: ‘The use of sources in Mughal historiography’, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. Series 3*, 5-3, pp.361-373.

M. Athar Ali 1999: ‘Translations of Sanskrit works at Akbar’s court’, I. A. Khan (ed.), *Akbar and his age*, New Delhi, pp.171-180.

M. E. Bell 1885: *Memoir of General John Briggs of the Madras army: With comments on some of his words and work*, London.

E. Blochet 1905-34: *Catalogue de manuscrits persans de la Bibliothèque Nationale*. 4 vols., Paris.

A. Camps 1957: *Jerome Xavier S.J. and the Muslims of the Mogul Empire*, Schöneck-Beckenried.

K. Chatterjee 2009: *The cultures of history in early modern India: Persianization and Mughal culture in Bengal*, Delhi.

P. Chatterjee 1994: ‘Claims on the past: The genealogy of modern historiography in Bengal’, in D. Arnold & D. Hardiman (eds.), *Subaltern studies 8*:

*Essays in honour of Ranajit Guha*, Delhi, pp.1-49.

- S. Conermann 2002: *Historiographie als Sinnstiftung: Indo-persische Geschichtsschreibung während der Mogulzeit (932-1118/1516-1707)*, Wiesbaden.
- S. K. Das 1978: *Sahibs and Munshis: An account of the College of Fort William*, New Delhi.
- S. T. Delgoda 1992: "Nabob, historian and Orientalist." Robert Orme: The life and career of an East India Company servant (1728-1801)', *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. Series 3*, 2-3, pp.363-373.
- A. M. Deshpande 1987: *John Briggs in Maharashtra. A study of district administration under early British rule*, Delhi.
- S. Digby 2001: 'The Indo-Persian historiography of the Lodi Sultans', F. Grimal (ed.), *Les sources et le temps*, Pondicherry, pp.85-105.
- R. M. Eaton 2000: 'Temple desecration and Indo-Muslim states', D. Gilmartin & B. B. Lawrence (eds.), *Beyond Turk and Hindu: Rethinking religious identities in Islamicate South Asia*, Gainesville, pp.246-281.
- H. M. Elliot and J. Dowson (eds.) 1867-77: *The history of India as told by its own historians. The Muhammadan period*, 8 vols., London.
- C. W. Ernst 2003: 'Muslim studies of Hinduism? A reconsideration of Arabic and Persian translations from Indian languages', *Iranian Studies*, 36-2, pp.173-195.
- H. Ethé 1903: *Catalogue of Persian manuscripts in the India Office Library. Volume I*, Oxford.
- F. B. Flood 2009: *Objects of translation: Material culture and medieval "Hindu-Muslim" encounter*, Princeton & Oxford.
- A. T. Gallop 1999: 'The geneological seal of the Mughal Emperors of India', *Journal of the Royal Asiatic Society, Series 3*, 9-1, pp.77-140.
- A. Ghosh 2006: *Power in print: Popular publishing and the politics of language and culture in a colonial society, 1778-1905*, New Delhi.
- J. J. L. Gommans 1995: *The rise of the Indo-Afghan empire*, c. 1710-1780, Leiden.
- N. Green 2006: 'Blessed men and tribal politics: Notes on political culture in the Indo-Afghan world', *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 49-3, pp.344-360.
- N. Green 2009: 'Journeyman, middlemen: Travel, transculture, and technology in the origins of Muslim printing', *International Journal of Middle East Studies*, 41-2, pp.203-224.

- J. S. Grewal 1970: *Muslim rule in India: The assessments of British historians*, Calcutta.
- A. Gupta & S. Chakravorty (eds.) 2004: *Print areas: Book history in India*, Delhi.
- P. Hardy 1960: *Historians of medieval India: Studies in Indo-Muslim historical writing*, London.
- T. Hayoz 2005: 'Historiographie als Selbstdarstellung: *Tārīḥ-i Nuṣratgāngī*: Ein indo-persisches Geschichtswerk um 1800', *Asiatische Studien*, 59-4, pp.1039-76.
- P. Jackson 1999: *The Delhi Sultanate: A political and military history*, Cambridge.
- K. Jahn 1965: *Rashīd al-Dīn's history of India*, The Hague.
- J. A. Khan 2005: *Early Urdu historiography*, Patna.
- A. von Kügelgen 2006: 'Zur Authentizität des "Ich" in timuridischen Herrscherautobiographien', *Asiatische Studien/Études asiatiques*, 60-2, pp.383-436.
- Z. U. Malik 2004: 'Perspectives from eighteenth century regional historiographies: A study of Tuhfah-i-Tazah', M. Haidar (ed.), *Sufis, Sultans and feudal orders: Professor Nurul Hasan commemoration volume*, New Delhi, pp.277-295.
- J. Marek & H. Knižková (tr. O. Kuthanová) 1963: *The Jenghiz Khan miniatures from the court of Akbar the Great*, London.
- H. Mashita 2001: 'The discrepancy of chronology of *Ṭabaqāt-i Akbarī*: An introduction to a survey of manuscripts', *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 35, pp.39-71.
- H. Mashita 2003: 'A historiographical study of the so-called *Aḥwāl-i Asad Big'*', *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 36-1, pp.51-103.
- A. F. Mehren 1857: *Codices Persici, Turcici, Hindustanici variique alii Bibliothecæ Regiæ Hafniensis*, Hafniæ.
- Mohibbul Hasan 1983: *Historians of medieval India*, Meerut.
- H. Mukhia 1976: *Historians and historiography during the reign of Akbar*, New Delhi.
- H. Mukhia 1998: 'Medieval India: An alien conceptual hegemony?', *The Medieval History Journal*, 1-1, 1998, pp.91-105.
- K. A. Nizami 1983: *On history and historians of medieval India*, New Delhi.

- M. Ogborn 2007: *Indian ink: Script and print in the making of the English East India Company*, Chicago and London.
- M. Pernau (ed.) 2006: *The Delhi College: Traditional elites, the colonial state, and education before 1857*, Delhi.
- W. Pertsch 1888: *Die Handschriften-Verzeichnisse der Königlichen Bibliothek zu Berlin. Vierter Band: Verzeichniss der persischen Handschriften*, Berlin.
- S. H. Qasemi 2000: 'Persian chronicles in the nineteenth century', M. Alam and F. 'Nalini' Delvoye & M. Gaborieau (eds.), *The making of Indo-Persian culture: Indian and French studies*, New Delhi, pp.407-416.
- C. Rieu 1879-83: *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*, London.
- S. A. A. Rizvi 1952: 'Abu'l Fazl's preface to the Persian translation of the Mahabharat', *Proceedings: Indian History Congress* (Nagpur, 1950), 13, pp.197-201.
- S. A. A. Rizvi 1975: *Religious and intellectual history of the Muslims in Akbar's reign*, New Delhi.
- E. Sachau & H. Ethé 1889: *Catalogue of the Persian, Turkish, Hindūstānī, and Pushtū Manuscripts in the Bodleian Library, Part I, The Persian Manuscripts*, Oxford.
- J. Sarkar 1901: *India of Aurangzeb (Topography, statistics, and roads)*, Calcutta.
- J. N. Sarkar 1977: *History of history-writing in medieval India: Contemporary historians. An introduction to medieval Indian historiography*, Calcutta.
- J. N. Sarkar 1982: *Romance of historiography from Shah Alam I to Shah Alam II (Non-European)*, Calcutta, 1982.
- A. Schimmel 1982: *Islam in India and Pakistan*, Leiden.
- S. R. Sharma 1982: *A descriptive bibliography of Sanskrit works in Persian*, Hyderabad.
- G. Shaw 1981: *Printing in Calcutta to 1800*, London.
- I. H. Siddiqui 2010: *Indo-Persian historiography, up to the thirteenth century*, Delhi.
- U. Stark 2007: *An empire of books: The Naval Kishore Press and the diffusion of the printed word in colonial India*, New Delhi.
- C. A. Storey 1927-39: *Persian literature: A bio-bibliographical survey. Volume I: Qur'ānic literature; History and biography, Part I: Qur'ānic literature; History*, London.
- T. R. Trautmann (ed.) 2009: *The Madras School of Orientalism: Producing*

- knowledge in colonial South India*, New Delhi.
- S. M. Waseem (ed.) 2003: *Development of Persian historiography in India: From the second half of the 17th century to the first half of the 18th century*, New Delhi.
- О. П. Шеглова 2001: *Персоязычная литографированная книга индийского прозвобства*, (XIX в.) Санкт-Петербург.
- 宇野伸浩 2002: 『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味』『東洋史研究』 61-1, pp.34-61.
- 大塚修 2007: 「キニク氏族とアフラースイヤーブ: ペルシア語普遍史叙述の展開とセルジューク朝の起源」『オリエント』 50-1, pp.80-105.
- 小笠原弘幸 2008: 「オスマン王家の始祖としてのヤベテとエサウ: 古典期オスマン朝における系譜意識の一側面」『オリエント』 51-1, pp.110-139.
- 小笠原弘幸 2009: 「古典期オスマン帝国における正統の創造: オグズ伝承の分析から」『史学雑誌』 118-11, pp.1-35.
- 小倉智史 2010: 「カシミールのペルシア語年代記におけるスーフイー伝: 在地有力者との関係を中心に」『イスラム世界』 74, pp.33-65.
- 上村勝彦 2003: 『インド神話: マハーバーラタの神々』筑摩書房 2003.
- 榊和良 1994: 「ペルシヤ語訳『ヨーガヴァシシュタ』文献について」『印度学仏教学研究』 43-1, pp.87-91.
- 榊和良 2001: 「『マハーバーラタ』ペルシア訳とアブル・ファズルの君主論」『印度学仏教学研究』 16, pp.34-48.
- 中里成章 2009: 「近世のインドにおける歴史叙述」佐藤正哲・中里成章・水島司編『世界の歴史 14 ムガル帝国から英領インドへ』(文庫版)中央公論社, pp.678-686.
- 真下裕之 1999: 「Akbar Nāmah と Ṭabaqāt-i Akbarī: mansab 制度史研究序説」『西南アジア研究』 51, pp.43-74.
- 真下裕之 2000: 「16世紀前半北インドの Muḡul について」『東方学報』京都72, pp.738-720.
- 真下裕之 2008: 「イスラーム化の史実と伝説: 南アジア史におけるイスラーム信仰戦士」共生倫理研究会編『共生の人文学: グローバル化時代と多様な文化』神戸大学, pp.190-214.
- 真下裕之 2009: 「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界: もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会, pp.205-231.
- 守川知子 2007: 「ロマンスからヒストリアへ: ピーソトゥーン碑文とイランにおける歴史認識」『上智アジア学』 25, pp.1-48.
- 守川知子 2010: 「『イラン史』の誕生」『歴史学研究』 863, pp.12-21.
- 矢野道雄編 1980: 『科学の名著 1 インド天文学・数学集』朝日出版社.